

拝啓 新村出様

柳田国男書簡からみる民俗学史断章

菊地 暁

Dear Izuru Shinmura : Fragment of History of Folklore Studies Seen in Letter of Kunio Yanagita
KIKUCHI Akira

- ①はじめに—方法としての京都
- ②書簡概要—重山文庫と新村文庫
- ③書簡管見—民俗学史断章
- ④おわりに—新村と柳田の「くされ縁」

【論文要旨】

従来の「民俗学史」が抱えてきた「柳田中心史観」「東京中心史観」「純粋民俗学中心史観」ともいうべき二連の偏向を打開すべく、筆者は「方法としての京都」を提唱している。その環として本稿では国民的辞書『広辞苑』の編者・新村出（一八七六—一九六七）を取り上げる。新村は柳田国男と終生親交を結び続けたが、その学史的意義が正面から問われたことはこれまでなかった。その理由の一端は、両者の交流を跡づける資料が見つからなかったことによるが、筆者は、新村出記念財団重山文庫ならびに大阪市立大学新村文庫の資料調査から、柳田が新村に宛てた五〇通あまりの書簡を確認した。これらは便宜的に、a) 研究上の応答、b) 資料の便宜、c) 運動としての民俗学、d) 運動としての方言学、e) 交友録、に区分できる。これらの書簡からは、明治末年から晩年に至るまで、語彙研究を中心とした意見交換がなされていること、柳田の内閣書記官記録課長時

代に新村が資料閲覧の便宜を得ていること、逆に柳田が京大附属図書館長の新村に資料購入の打診をしていたこと、柳田が「山村調査」（一九三四—一九三六）の助成金獲得にあたり、新村に京大関係者への周旋を依頼していること、一九四〇年創立の日本方言学会の運営にあたって、研究会開催、学会誌発行、会長選考、資金繰りなど、さまざまな相談していること、等々が確認される。こうした柳田と新村の関係は、一高以来の「くされ縁」と称するのが最も妥当なように思われるが、その前提として、「生ける言語」への強い意志、飽くなき資料収集、言語の進歩への樂觀、といった言語認識の基本的一致があることを忘れてはならない。さらには、二人の関係が媒介となつて、京大周辺の研究者と柳田民俗学との交流が促進されたことも注目される。

【キーワード】 柳田国男、新村出、京都、言語、書簡

① はじめに—方法としての京都

「民俗学史」が従来抱えてきた問題点については、既に指摘したことがある（拙稿 二〇〇五）。柳田中心史観、東京中心史観、純粹民俗学中心史観、そういった一連の偏向により、柳田を中心とした東京周辺の研究者により民俗学がディシプリンとして確立される過程を描く予定調和的な物語に終始し、結果として各地のさまざまな主体によって繰りひろげられた多様な民俗学的実践が欠落してしまうという問題である。

これに対して筆者は「方法としての京都」というアプローチを提示した（同前¹⁾。粗野に対する洗練、野外に対する文献、在野の学に対するアカデミズム——対象、方法、主体とあらゆる面で「野の学問」に正反對の要素を抱え込む「京都」という都市は、それゆえにこそオーソドックスな民俗学を相対化させる契機となる。そしてじじつ、「京都」では従来の「民俗学史」が捉えきれない多様な主体に民俗学の影響が到達していたのである（拙稿二〇〇八、二〇〇九）。

ここでは、そのような展開の一例として国民的辞書『広辞苑』（岩波書店 一九五五）の編者として名高い新村出を取り上げてみたい。新村の略歴は以下の通りである。²⁾

新村出。明治九年、山口県山口町（現山口市）生まれ。父は幕臣で当時山口県令を務めた関口隆吉。一高在学中に上田万年の講演を聴いたことから言語学を志し、帝国大学文科大言文学科でその上田の指導の下、日本語の言語学的研究に着手。明治四二年、新設された京都帝国大学文科大言文学講座の初代教授に就任。以後、終生京都に居を置き、日本語の比較言語学的研究、南蛮・キリシタン史料の研究、語源・語誌研究などに膨大な業績を残す。

この新村が柳田と終生親交を結び続けたことは思いのほか知られていない。正確にいえば、その親交の学史的意義が正面から問われたことは、これまでなかった。幕臣の子と庶民の子、帝大教授と民間学者、インドア派とアウトドア派、一見相反する二人の経歴を考えるとそれも無理からぬことかもしれない。とはいえ、二人の学問は何度となく交差し、そこから紡ぎあげられた言語観は意外なほど共鳴する。後学に見落としがあったことは否めない事実だろう。

本稿は、新村出記念財団重山文庫ならびに大阪市立大学新村文庫に所蔵される書簡群を紹介し、そこから新村と柳田の知的交流を考察する。なお、二人の知的交流と言語観を概観した拙稿（印刷中^{a)}）、二人の旧蔵書を検討した拙稿（印刷中^{b)}）も併せて参照いただければ幸いである。

② 書簡概要—重山文庫と新村文庫

『新村出全集』（筑摩書房 一九七一一七三）および『定本柳田国男集』（筑摩書房 一九六二—七二）には、それぞれ書簡が載せられているが、どういうわけか二人の間で交わされた書簡が収録されていない。³⁾年譜・索引等から二人の交流がある程度確認できるにもかかわらず、両者の親密な交流が可視化されなかったのは、おそらく書簡の不在が一因をなしている。

柳田が新村に宛てた書簡、すなわち新村側に残った分に関していえば、未収録はどうやら未整理のためだった。新村出の関係資料は昭和五六年五月六日に設立された財団法人新村出記念財団に残されている。同財団は「故新村出の手稿及び収集した図書・資料の整理保存及び公開を計るとともに、国語学・言語学の調査研究を促進し、助成してその進歩発展を図り、もって我が国の学術の発展に寄与すること」を目的としたもの

で〔記念文集編集委員会二〇〇六・一〕、新村出の原稿、書簡、蔵書等は「重山文庫」として保存され、今も整理が続けられている。同財団編『新村出博士宛発信者名簿（未定稿）』（一九九六）によれば、発信者数約三〇〇〇人、総数約一二七〇〇通の新村宛書簡（含むハガキ）が残されている。筆者はこのうち柳田国男の新村宛書簡五一通を閲覧・調査することができた。

これとは別に大阪市立大学・学術情報総合センター（旧附属図書館）新村文庫にも柳田の新村宛書簡が所蔵されている。同文庫は大阪市立大学が新村出旧蔵書を昭和二四年、四五年の二回にわたって購入したもので、二万冊を超えるという新村蔵書のうち「言語学、国語、国文学関係の文献を中心とした」旧蔵書の主要部分七五七九冊が所蔵されている⁽⁴⁾。これらの蔵書には新村出による書込、貼込、挟込がなされており、そのなかから柳田が新村に宛てた三点の絵ハガキと一点の書簡断簡を発見することができた。このうち書簡断簡は重山文庫所蔵書簡の一部であると判明したため、両文庫あわせて書簡一七点、ハガキ三七点、合計五四点を確認することができた。これらを年次順に並べて翻字し、注記を加えたのが資料「新村出宛柳田国男書簡一覧」である。

この書簡群の特徴をあげると、まず、量の多さを指摘できる。柳田の書簡を収録した『定本』別巻四には四七名に宛てた五〇〇通あまりの書簡が掲載されている。「本巻に提供された書簡は、頁数の都合上、その全部を掲載することが出来なかつたので、編集部において適宜選択、掲載した」とあるが〔柳定別四・六八九〕、総数や選択基準など不明な点が多い。このうち、佐々木喜善宛（一〇八通）、胡桃沢勘内宛（九五通）が群を抜くほかは、大森義憲（二七通）、南方熊楠（二六通）、平山敏治郎（二五通）と多くても三〇通弱に、大半は数通にとどまっている。新村宛五四通という数字が特筆に値することが了解されるだろう⁽⁵⁾。

第二に時期的な広がりがある。柳田（一八七五—一九六二）と新村（一

八七六—一九六七）は旧制一高在学中から晩年まで、六〇年以上にわたる交友を結んでおり、年代による粗密はあるものの、書簡は明治四四年から昭和三五年まで五〇年あまりに及んでいる。大正期に集中する南方熊楠、戦前で途絶える佐々木喜善、胡桃沢勘内らのものと異なり、長いタイムスパンでの交友関係、とりわけ晩年のそれをたどれる点も希有といつてよい。

さらには、関連資料の存在も重要である。柳田宛新村書簡の行方は未詳だが、それ⁽⁶⁾に代わるものとして新村旧蔵書の書込がある。新村自ら、「私の癖として、それらの書を得たときには、どこの店で求めたとか、何びとから贈られたとか、いつ読みふけり、いつ読みおえたかということ、その書物の扉や奥付の近くに、なにかしら簡単に書きつけておくのが例であった」と述べている通り〔新全二三二〇二〕、旧蔵書には多くの書込、貼込、挟込があり、それらが書簡の欠を補う情報源となる。このほか、新村の著作には柳田への言及が少なく、これらを利用することで柳田に対する新村の応答を相当程度明らかにすることができる〔拙稿・印刷中 a、b〕。

とはいえ、予め結論的に述べてしまうと、この書簡群の最も特筆すべき点は「老友」（柳全一九六七三）新村に宛てられたということそれ自体にある。あらためて考えてみると、柳田に「友人」はどれだけののだろうか。柳田が後に「民俗学」と呼ばれることとなる学問運動を起し上げるなかで、全国各地に数多の協力者を見出し、膨大な人的ネットワークを築き上げていったことは今更指摘するまでもないが、そのなかで、柳田を「師」と仰ぐわけでもない、真に「友」と呼びうる人物はどれほどいたのだろうか。とりわけ、終生交流を保ち続けた人物を挙げるなら、新村がその最有力候補のように思われる。本書簡群には、そのような「老友」相手であればこそその率直な物言いが随所に見受けられ、他の資料からはなかなか照射されない、柳田、そして運動としての民俗学の生々し

い姿が浮かび上がる。この点こそ、新村宛柳田書簡の最大の魅力だろう。

③ 書簡管見―民俗学史断章

新村宛柳田書簡は一点一点それぞれに二人をめぐる同時代状況が刻まれている。詳細は書簡原文を御覧いただくこととして、ここでは便宜上、

a) 研究上の応答、b) 資料の便宜、c) 運動としての民俗学、d) 運動としての方言学、e) 交友録、の五点につき、関連資料とあわせて紹介したい。

a) 研究上の応答

新村と柳田の学問面での交流が痕跡を残すのは、新村が京大に着任し、柳田の郷土研究が本格化する明治末年のことである。明治四四年三月二十六日書簡(資料1)がその一端を伝えている。新村は創刊間もない京大文科の紀要『芸文』に「鷹狩」を発表、古今東西の鷹狩資料を紹介するなかで、北アジアで鷹をさす「クチ」「クシ」という古語を取り上げる。これが「クヂラ」「クシラ」という地名を気にかけていた柳田の目に止まり、この書簡をしたためたと推測される。このなかで柳田は「ハマ」「コハ清水」「カルイ沢」「トウマイ」「石名坂」などの語義不詳の地名について尋ねるとともに、「実は小生ハ諸国辺土の地名を集め地形と比照して死滅したる古国語を發掘し、かねてハ古代人の生活を探り申度」と自らの地名研究のアプローチを披瀝、参照すべき辞典等についてアドバイスを求めている。なお、同年七月、美濃越前の視察を終えた柳田は京都に立ち寄って新村やその同僚、内藤湖南(東洋史)、小川琢治(地理学)などと面会しており、本書簡に始まる新村と柳田の応答が、柳田と京大文科スタッフたちの学問的交流が開始される一因になったものと推測さ

れる。

これ以後も、「岨をハエ、ハチといふこと」(昭和三年一月二日書簡:資料7)、「オツリ」(昭和二年六月三〇日書簡:資料21)、「若」(昭和一六年二月二日ハガキ:資料30)、「スワンメエデンの類型」(昭和二六年三月二日ハガキ:資料50)など、語彙を中心にさまざまな質疑応答がなされたことが確認される。終生続けられた研究上の応答からは、互いの学識に対する深い信頼を読み取れるだろう。

b) 資料の便宜

柳田と新村はその公職上の地位から互いに資料的な便宜を提供しあう関係でもあった。たとえば柳田は官僚時代、内閣書記官記録課長を兼任するが(明治四三年六月二日〜大正三年四月一日)、明治四四年十月一日に京都帝国大学図書館長となった新村は、柳田の便宜で内閣文庫を調査している。後年、「近世日本と海外殊に南国遠西との交渉に因める所の史料と典籍とを彙集し且つ異国情緒の豊かなる著作を加えた」(新全八・五〇二)『海表叢書』全六卷(更生閣 一九二七―一九二八)の編纂に際して、その成果が活用されている。同叢書収載の「宝曆十二年壬午琉球船が土佐国西南海灣の入口に位する柏島の沖より湾内の大島浦に漂着したのを、藩儒戸部良熙が就いて取調べて琉球の事物について尋問した筆記談」(同前:五四二)である『大島筆記』は、京大所蔵本に欠けていた付録一冊を、「柳田国男氏の文庫主管中」の「大正三年」に「補写」したという(同前:五四一―五四二)。

後に新村が「同君が内閣法制局の参事官か書記官の在任中、明治の末か、大正の初か、私が京大教授として附属図書館長に兼補されて居た時分に、同君も内閣文庫を管理中、同文庫を寛大に閲覧することを許容せられ「…」、その際の副産物として忘却しない逸事は、柳田君から招待されて、一夕、春の一夕であつたが、柳橋の、たぶん柳橋亭とかであつ

たとおぼえるが、河畔の小室に、島崎藤村と同席し浅酌談したことがあった」〔新全一四・五五五〕と述べているのは、あるいはこの大正三年を指すのかもしれない。

一方、柳田も新村の便宜を得ている。大正八年に官界を去り、その翌年一二月、生涯最初で最後の沖縄への旅となる、いわゆる『海南小記』の旅に赴く柳田は、出発前の一〇月一九日、新村の案内で京大附属図書館を訪れ琉球関係古記録を閲覧している〔新全年譜、柳田年譜〕。

こうした柳田の南島への傾斜という文脈で興味深いのが、大正一四年九月一八日付書簡（資料6）である。沖縄伝道中の「米人宣教師ブール」が琉球伝道の先駆者ベッテルハイムの顕彰のため、遺族から資料を借り出して伝記を作成中であり、その「当時の史料となすべきもの少からざる」資料が近日返還されることを憂い、「何とかして此際一本のコピーなり共、日本に保存し置き度候が、右ブール氏世話の下に鹿児島にて之を写取らしむへき費用出途無之候、二百円内外のことならば其本の値として貴図書館にて御支出の見込ハ無之哉」と資料購入費用の負担を打診している。研究上の同志としてのみならず、公職上の地位までもあてにしているわけである。残念ながら該当資料は京大附属図書館に所蔵されておらず、柳田の依頼も成就ならなかったようだ。

なお、資料的な協力という点では、図書の授受が相当数行われているのだが、詳細は別稿にゆずる〔拙稿・印刷中b〕。

c) 運動としての民俗学

本書簡中でとりわけ興味深いのは学会運営をめぐる記述の生々しさである。民俗学関係では、昭和九年二月一五日付書簡（資料16）が注目される。

さて昨年の九月より毎週一日づつ小著「民間伝承論」の筆記を後藤

興善君に頼み候際、傍聴者十余人有之何れも小生が私案に従ひ全国的に積極調査の行脚を試みんと決意いたし候に付、色々と案をねり各県一以上の最も世に知られざる山村の習俗慣行を今後三年の間に調べて見ることに致し、其経費の補助を學術振興会に申請仕候。貴堂最近に委員を御抜け被成候ハ力落しに候へ共幸ひに瀧「精二」委員長を始め東京の諸氏にハ其趣意を同情を以て御聴取被下候羽田「亨」教授にも御差支なからば御可認被下候やうに内々御口添を給り度願上候。

柳田民俗学確立のメルクマールともいふべき「山村調査」〔一九三四（三六）の実施要領を説明し、學術振興会への補助金獲得に向けて、學術振興会委員で新村の同僚である羽田亨（東洋史）に協力を依頼するよう要請しているのだ。赤裸々なまでのアカデミック・ポリティクスだが、民俗学の協力者として京大周辺を待みとしていることが留意される。⁽⁷⁾

じつさい、当時の京大では国史学教授・西田直二郎を中心として京大民俗学会が設立され（昭和二年一二月）、学科・専攻を越えて集まった学徒たちが活発に活動しており、柳田自身も上洛の度にこれに参加している〔拙稿二〇〇八、二〇〇九〕。また、昭和九年、昭和一二年には西田の尽力によって設けられた京都府神職会の寄付講座（神道史講座）において、柳田の集中講義が実施され、受講生に多大な感銘を与えている。⁽⁸⁾ 当時の京大周辺には民俗学に一定の理解を示す研究者が相当数存在し、柳田にとって不可欠の学問的援軍だったわけである。

d) 運動としての方言学

一方、新村にとってより本筋となるのは国語・方言学に関するものだろう。柳田『蝸牛考』（刀江書院 一九三〇）を含む「言語誌叢刊」についての相談（資料9）など、興味深いやりとりは多々見られるが、とり

わけ注目に値するのは、昭和一五年一〇月一三日創立の日本方言学会をめぐる書簡である。柳田が初代会長、新村が二代会長と会務の中心を務めたことから、研究会・講演会（資料26、28、31）、学会誌（資料26、28、29）、会長選考（資料32、33、35、36）、資金繰り（資料26、37）などさまざまな事項が話題となる。

生々しいのはなんといっても資金繰りに関するもので、昭和一五年一月三日付書簡（資料26）では、「名誉会員ハ功を立てさせてから推薦する以外に学位に非ずして此会に関心をもつ大人物、平たくいふなら金を出し助けてくれさうな人には前に名誉会員になつてもらふ方がよく無いかと存し候。どうか御賛成被下度候実ハ放送協会、長を入れたき下心に候。文部大臣もと存しをり候。是非ご賛同を得たく候」と、なりふり構わぬ金策が提案されている。

また、寄付金に関するトラブルに言及した昭和一七年一〇月一日付書簡（資料37）には、「実は会へ出て時を費すよりも、砧村に引込んで居て独りで働く方が能率が上ると存じ、もう少し古いノートの整頓に打込みたいと思つて居るのです。方言をやや片づけたら、其次はメエルヘンだけを専門に楽みたいと思つて居ります」と嫌気のさした心中が吐露されている。「メエルヘンだけを専門に楽みたい」という願いは、敗戦後、「いよく働かねばならぬ世」（柳全二〇・六七二）となつたために実現を見なかつたが、当時の柳田の志向を考える上で興味深い一節である。

また、パブリシティに尽力する姿も留意すべきだろう。昭和一六年一月一二日、文部省国語課長・大岡保三、木下李太郎（太田正雄）、岸田国土、新村、柳田という参加者によって放送座談会「国語を語る」がラジオに流れるが、この企画が柳田によって画策されていたことが同年一月五日付書簡（資料29）によって確認できる。文部省に国語課が新設せられたのを機に、「この際その大岡課長ニ出来るだけ今の腹を打明けてもらひ、それを全国の小学教師の心ある者に聴かせるやうニ」と意見し

て番組を立ち上げさせ、「文士として最近の国語現象に色々の注文と不満とをもちつ、今まで一度も放送ニ出たことが無い」木下李太郎、「種々国語について多くの考をもつて居」りかつ「人気の多い」岸田国土、それに新村、柳田が加わるというラインナップを助言している。「私のいふことハ実ハ今までハきつ過ぎるので悦ハれず、又自分でも戒めて居りましたら、今度ハ更に謹慎して努めて穩健な実現の出来さうな意見の陳列に産婆したいと念じて居ります」と珍しく（？）自重しているのも面白い。

また、同書簡は方言学会の閉塞状況にも言及する。

只今の大きな心配は、折角会が出来舞台はと、のつても皆が尻込をして何も発表しないで居こと、物笑ひに絶りはすまいかといふことです。少しかあとで訂正せられるやうなことでもどしく言つてのけるやうな勇気を若い人たちにもたせたいと思つて居ります。それで私の在任中に一度ハ大会にて何か御話して下され、且つ尻込座の尻を打つことに御手を御貸し下され候やう夙くから願つて置きます。只今の形勢では全く任期を一年にして置いてよかつたと思ふばかりです。何の為に学会を作つたらうかという感じもしないでハありません。どうですもう一働き御一しよに働いて見ようではありませんか。

せっかく立ち上げた学会の不振を嘆きつつ、新村にテコ入れの助力を求めている。講演、放送、雑誌等のメディアを効果的に活用し、学会内外で学問的関心を高めようと努力する跡がうかがわれるだろう。学問が多数の協同を要する社会的営為であることは柳田の大前提であり、そして新村はその貴重なパートナーなのである。

e) 交友録

書簡からはしばしば意外な人と人との出会いが顔をのぞかせる。考古学会遠足で訪れた足利から送られた大正二年四月二〇日付絵ハガキ(資料3)には、柳田、中島信虎(経済学者)、後藤朝太郎(言語学者)の三人が名前を寄せている。また国際連盟委任統治委員として滞欧中の柳田がベルンから寄せた絵ハガキ(資料4)には、新村の同僚である京大文科の成瀬無極(ドイツ文学者)、京大農科の橋本伝左衛門(農業経済学)が名を連ねている。いずれもそれぞれの分野で著名だが、こうした並びで登場することは予想外だろう。敗戦後、柳田が新村の消息をソシユールの翻訳紹介で有名な言語学者・小林英夫から聞いているのもその類かもしれない(資料39)。

新村、柳田、吉村冬彦(寺田寅彦)、斎藤茂吉の四人の会合が流会になった一件についても興味深い書簡がある。『現代日本文学全集』第五八編「改造社 一九三二」に四人の随筆が収録されたのを機として、会合が予定されたものの、茂吉の旧友・平福百穂の訃報により流会となった。後年、柳田は「俳諧と俳諧感」のなかで、「どうして寺田さんがあれ程の執心を以て、連句の俳諧に遊んで居られるのか、それを尋ねたらきつと新しい答へが得られ、又同席の二老も多分耳をそばだて、それを聴き、たゞ庭の樹を眺めたりお菓子を食べたりして、話の切れ間を待つといふやうなことはせられなかつたらう」と面談の機を逸したことを嘆いている(柳定七・四八二)。このなかで「昭和七年の秋」とあるのは昭和八年の誤りであり(資料15)、かつ、「もう一度是を言ひ出す力が抜け」たわけではなく(柳定七・四八一)、少なくとも昭和九年四月までは日程調整が続いていたことが確認される(資料18)。

柳田が亡弟・松岡静雄の遺著にまつわる相談をもちかけた昭和十一年六月三〇日および七月二三日の書簡(資料21、22)も興味深い。松岡遺

著『ミクロネシア語の総合研究』(岩波書店 一九三五)は、「自費にて八十部だけ印刷」したばかりで遺族にはかなりの借金が残ったが、「日頃似ず穩健」な内容で「その整理せし源料と考へ方とハ参考の価有」書物なので、「数百部を刷り増して図書館や大学等にも保存してもら」うことができれば、亡弟の記念にもなり遺族の借金も解消するのでご助力を乞うというものである。頼まれた新村も難儀だっただろう。国男の静雄に対する屈折した愛情が感じられる。

書面からはさまざまな人間関係が浮かび上がるが、とはいえ、当たり前ながら基本的には新村と柳田の交流記録である。じつさい、これらの書信には新村の体調や伴侶への気遣いの言葉が頻出し、また、旅先からのあいさつ、新村からの来訪、新村邸への訪問に関するお礼も少なくない。とりわけ、双方が上京・上洛を控えるようになった晩年は、こうした友への想いをますます募らせていったようだ。「小生の如きハ増々困敗且つ役廻人に小言をいふ為に活きて居申候か如き感有之。我ながらうとまじき限りに候」と老衰をこぼした昭和三〇年二月二四日付絵ハガキ(資料49)には、録音テープを用いて互いの声を聞こうとしたことがうかがえる。また、昭和三十一年三月二二日付絵ハガキ(資料51)では、『広辞苑』の校正に目を酷使する新村をいたわり、ヤツメウナギ油の錠剤を送り、新村もお礼の歌を贈っている(参考資料)。そして現存する最後の書簡となる昭和三十六年五月四日付の絵ハガキ(資料54)は、⁽⁹⁾学士院例会への出欠を問い合わせつつ、「旧い人たちが段々へりますので一人で行ってハ物を言ふ元気が出ません」「上洛中止の内規も折々ハ後悔するほど御面会の折を待ちこかれて居ります」と弱音を吐いている。「老友」新村に対してこそ述べられた、柳田最晩年の赤裸々な心情だ。

④ おわりに―新村と柳田の「くされ縁」

以上、新村宛柳田書簡を概観してきた。民俗学史を決定的に読み替えるとは、ミッシングリンクを埋め、事実関係を補訂し、柳田国男にとつての「京都」の重要性を裏書きし肉付けするものであることが確認されたい。

それにしても、考えてみれば二人の親密な交流は容易に予測し得たはずなのに、従来ほとんど注目されてこなかったのは何故だろうか。書簡の未発見という資料的な制約があり、また、「野の学問」という民俗学イメージの一人歩きが柳田とアカデミズムの接点を不可視化させていたことも関わるのだが（拙稿 二〇〇九）、より直接的には、著作のレベルで柳田民俗学に対する新村のプレゼンスが可視化されなかった、端的に言って、柳田の編著に新村がほとんど寄稿しなかったという事情がある。本書簡などから明らかになったのは、柳田の度重なる依頼にもかかわらず新村が執筆していないということ、それにもかかわらず、柳田が寄稿を依頼し続けているということである。列挙してみよう。

- ① 「甲寅叢書」〔一九二四〕。新村はこの叢書の発起人に名を連ねている。『郷土研究』二／一（一九二四）所収「甲寅叢書統巻予告」には新村『東西鷹狩源流考』および『日本西学史』が予定されているがいずれも刊行されず。後に新村は「内藤博士の思い出」〔歴史と地理〕三四／四・五合併号 一九三四〕において、内藤湖南『韃靼漂流記』とともに自著が未刊に終わった事情を述べている〔新全九〕。
- ② 『郷土研究』（一九二三～二七）。四巻一、二号「休刊の辞」において柳田は、同誌に「鳥居強右衛門のやうな激励をして帰つて往つた人」もあつたとするが〔柳全二五・二三二〕、後年、それは「同

誌の刊行に同情の意を表しながら、一度も寄稿してくれない」「京都のS博士」のことだと述べている〔柳全二二・一〇二〕。この一件が柳田と新村の間にしばらくの微妙な懸隔をもたらしたことは、仲裁に与つた岡茂雄『本屋風情』（一九七四）に詳しい。

- ③ 『民族』（一九二五～二八）。大正一五年九月一八日付書簡（資料6）に「御稿ハ可成初号に間に合せ度」と創刊号への寄稿を依頼されつつも、結局二年遅れて三巻一号に「隼人語と馬來語」（一九二七）を寄稿（新全四）。なお、同じ書簡で新村の同僚・小川琢治にも寄稿依頼がなされている。

- ④ 「言語誌叢刊」（刀江書院 一九三〇～三六）。昭和四年一月七日付書簡（資料9）に「貴台御著何卒御看手たまはり度」とあるものの、新村の著書は刊行されず。

- ⑤ 『芸文』（京都文学会 一九一〇～三二）。昭和四年一月一七日付書簡（資料9）に「尚芸文には時間出来次第方言研究のエチユドめきたるもの御掲載を乞度候」と方言研究試論の執筆が依頼されているが、これも実現せず。柳田自身が関与する媒体ではなく、京大文科の紀要に掲載依頼している点が興味深い。

- ⑥ 『日本民俗学のために 柳田国男先生古希記念文集』全一〇輯（民間伝承の会 一九四七～四八）。柳田の古希記念事業の一環として企画された文集。新村は事業の発起人の一人。編集に携わつた橋浦泰雄の書簡（昭和一九年三月八日付洪沢敬三宛書簡、洪沢史料館所蔵）には「慾を云へばこれに新村「出」西田「直二郎」の両大家中の一人を加へたいのでありますが、御老人を余りせき立てるもの如何かと遠慮致して居る處であります」とあり、寄稿が依頼されていたと推測されるが、実現せず。

- ⑦ 『沖繩文化叢説』（中央公論社 一九四七）。昭和二年九月二二日付絵ハガキ（資料40）による依頼があるものの寄稿は実現せず。

なお、昭和二三年二月一九日付平山敏治郎宛柳田書簡に「沖縄文化叢書の第二輯に着手、新村・小牧實繁の二君二第一輯御目にかけ置き候、御迷惑ながら小生の熱意御伝被下、第二輯に何か思ひ出やうのものを御寄稿被下候やう御頼被下度」とあり〔柳定別四：六〇四〕、続編の企画があり、かつ、新村への依頼がなされていることが知られるが、こちらは論集そのものが実現せず。

これでは、新村と柳田の交流が浮かび上がらないのも当然といえようか。それにしても、何度となく原稿を落とされても、懲りることなく依頼する柳田の姿は、新村以外の人間相手にはちょっと想像し難い。柳田の気性の荒さを考えれば、二人の関係が破綻していてもおかしくなかつたはずだ。それがそうならなかつたのは、さまざまな理由があるが、つまるところ「老友」、すなわち一高以来の「くされ縁」という表現が最も相応しい気がしてならない。

ただし、それはあくまで言語観の基本的な一致があつてのことである〔拙稿「印刷中a」〕。二人の言語観としてまず挙げなければならないのは、「生ける言語」への強い意志だろう。予め措定された規範性から出発するのではなく、無限に流転する言語の歴史性をそのものとして認めることが二人の出発点となる。であればこそ、無数の言語事実を一つ一つ積み重ね、比較していくことによつてしか、言語現象の実態を解き明かすことはできない。飽くなき探索と帰納の営み、その徹底した資料への執着が第二の共通点となる。最後に、言語が変化して止まない存在であればこそ、それはより良く変わることがありうるし、それをより良く変えることができるとする、言語の進歩への樂觀である。こうした言語認識の一致があればこそ、さまざまな紆余曲折にもかかわらず、二人は互いの学識を尊敬し続け、親交を結び続けることができたわけである。

さらに、こうした二人の関係が媒介となつて、京大まわりの研究者と柳田民俗学との交流が促進されたこと、柳田民俗学にとつて新村が京大

へのアクセスポイントとなつていたことは留意してよい。京大における民俗学運動は、京大文科の第二世代・西田直二郎を中心として昭和初期に展開された京大民俗学会の活動により最盛期を迎えるわけだが、その興隆の淵源として京大文科の創設に与つた第一世代と柳田との交流があり〔拙稿二〇〇九〕、わけても新村と柳田、二人の碩学の「くされ縁」があつたわけである。

そしてそのことは―自戒の念を込めつつ述べると―、民俗学史という対象／方法／目的を考えるにあつても一つの示唆を与えるだろう。もとより二人の交流は日本民俗学の歴史を織りなす一糸に過ぎないわけだが、にもかかわらず、「新村出」のいる民俗学史は、「新村出」のいない民俗学史に比べて、問いの厚みが決定的に異なるように思われてならない。およそ「民俗学」らしからぬ―と多くの人が漠然と考えていた―新村と柳田の学問がこのように幾重にも取り結ばれていたことを、どのよう受け止めるべきだろうか。単純に事例や資料をどんどん追加していけば良いという話では済まされない。何をもちつて民俗学の「歴史」と認め、いかなる対象の広がりや予想し、いかなる資料の博搜と読解からその有り様に肉薄するのか。構想力の深度と方法の柔軟性が試されているといわなければならない。

そのような位相において「民俗学史」という問いは、〈伝承〉に歴史／社会／文化批判の根拠を構想した〈民俗学〉の本願に、じつは限りなく接近する。

【付記】

本稿執筆にあつては、財団法人新村出記念財団・重山文庫、大阪市立大学学術情報センター・新村文庫で資料調査の便宜を得た。とりわけ新村出記念財団では、同財団理事長の堀井令以知氏、理事で新村出令孫の新村祐一郎氏、評議員の吉野政治氏、職員の入江貞子氏から多岐にわたるご教示を頂いた。また、書込の難読箇所については岩城卓二氏、黒

岩康博士のご助力を仰いだ。記して感謝する。

註

- (1) このアプローチを構想するにあたり、佐藤健二(二〇〇五、二〇〇九)などの一連の論考が参考となった。
- (2) 伝記事項は特に断りのない限り新村出記念財団編『新村出全集索引』(一九八三)、柳田国男研究会編『柳田国男伝』(一九八八)所収年譜に依る。また、『新村出全集』『定本柳田国男集』『柳田国男全集』からの引用は巻数と頁数のみ表記する。
- (3) 『新村出全集』一五巻には、「極めて筆まめだった」(新全一五・八〇六)新村の書簡のうち、全集編集に際して三二〇〇通あまりが収集され、そのうち、学術的、文芸的、歴史的、伝記的価値に基づいて選ばれた六一九通が収録されているが、ここには柳田宛書簡は含まれていない。
- (4) 大阪市立大学附属図書館(一九七八)による。なお、新村文庫と重山文庫の双方に柳田の著作が含まれるが、ジャンルや時期で区分できるわけではなく、どういった事情で新村文庫の買取分が選書されたか不明である。新村旧蔵柳田図書については拙論(印刷中b)参照。
- (5) とはいえ、松本博明「折口信夫宛柳田国男書簡」(一九九八)によれば、折口博士記念古代研究所には定本所収の「一三三」とは別に「四七点」の折口宛柳田書簡があり、合計「六二点」になるという。また、飯倉照平編『柳田国男 南方熊楠 往復書簡集』(一九七六)、安間清編著『柳田国男の手紙』(一九八〇)、館林市教育委員会文化振興課編『田山花袋宛柳田国男書簡集』(一九九二)などにもまとまった柳田書簡がある。
- (6) 重山文庫に残されたハガキのコピー一点(昭和三十三年三月二日)を除く(参考資料)。
- (7) このほかにも、昭和九年二月二〇日付絵ハガキ(資料17)で「鈴木虎雄君にも山村生活調査のことを御話被下度願上候」と、新村の同僚である中国文学者・鈴木虎雄への協力依頼がなされている。およそ民俗学とは接点のなさそうな鈴木だが、郷里が新潟県の郡部であること、一高・東大で柳田と同期であることなどが関与しているものと推測される。
- (8) 資料17、18にこの講義についての言及がある。
- (9) 来信については、「昭和三十七年」六月中旬頃、柳田君は米寿の祝いをした。そのころ彼からはがきを受け取ったが、これが最後の通信になった」と新村は述べている(新全一四・五五三)。

引用文献

- 飯倉照平編 一九七六『柳田国男 南方熊楠 往復書簡集』平凡社
 大阪市立大学付属図書館編・発行 一九七八『新村文庫目録』
 岡 茂雄 一九七四『本屋風情』平凡社
 菊地 暁 二〇〇五『主な登場人物―京都で柳田国男と民俗学を考えてみる―』柳田国男研究論集 四
 菊地 暁 二〇〇八『京大国史の「民俗学」時代―西田直二郎、その「文化史学」の魅力と無力―』丸山宏・伊従勉・高木博志編『近代京都研究』思文閣出版
 菊地 暁 二〇〇九『敵の敵は味方か?―京大史学科と柳田民俗学―』小池淳一編『民俗学的想像力』せりか書房
 菊地 暁 印刷中a「〈ことばの聖〉二人―新村出と柳田国男―」横山俊夫編『言語力の諸相』ミネルヴァ書房
 菊地 暁 印刷中b「ツバメ、カモメなどの展望車にてよみあちはいしことありけり―新村出旧蔵柳田国男著作の書入を読む―」『人文学報』九九
 記念文集編集委員会編 二〇〇六『泰山木 財団法人新村出記念財団設立二十五周年記念文集』新村出記念財団
 佐藤 健二 二〇〇五『運動としての民俗学』の歴史を織りなおす『柳田国男研究論集』四
 佐藤 健二 二〇〇九『方法としての民俗学/運動としての民俗学/構想力としての民俗学』小池淳一編『民俗学的想像力』せりか書房
 新村 出 一九七二―七三『新村出全集』全一五巻、筑摩書房
 新村出記念財団編 一九八三『新村出全集索引』筑摩書房
 新村出記念財団編・発行 一九九六『新村出博士宛発信者名簿(未定稿)』新村出記念財団編・発行 一九九八『重山文庫目録Ⅱ』
 新村出記念財団編・発行 二〇〇六『重山文庫雑誌目録』
 成城大学編・発行 一九六七『柳田文庫蔵書目録』
 館林市教育委員会文化振興課編 一九九一『田山花袋宛柳田国男書簡集』館林市
 野村純一他編 一九九八『柳田国男事典』勉誠出版
 松本 博明 一九九八『折口信夫宛柳田国男書簡』野村純一他編『柳田国男事典』勉誠出版
 安間清編著 一九八〇『柳田国男の手紙』大和書房
 柳田 国男 一九六二―七一『定本柳田国男集』全三六巻、筑摩書房
 柳田 国男 一九九七―刊行中『柳田国男全集』全三六巻(予定)、筑摩書房
 柳田国男研究会編 一九八八『柳田国男伝』三一書房

II 新村出宛柳田国男書簡一覽 II

〔凡例〕

*これは新村出記念財団重山文庫（五一通）および大阪市立大学学術情報総合センター新村文庫（三通）に所蔵された柳田国男の新村出宛書簡の一覧である。

*年月日、ハガキ・封書の別、消印、宛先、差出、本文、注記事項、付記（@）の順に記した。

*年月日は①柳田国男の記載、②消印、③新村出の記載、④書簡内容からの推測、よって記した。書簡内容からの推測の場合は付記のその根拠を示した。

*絵ハガキのタイトルは、絵ハガキ自体に印刷されている場合は「」で、翻字者が略記した場合は「」で示した。

*注記の典拠は、『新村出全集』全一五巻（筑摩書房一九七二―七三）、『定本柳田国男集』全三六巻（筑摩書房一九六二―七二）、『柳田国男全集』全三六巻（筑摩書房一九九七―刊行中）による場合は「新全巻頁」「柳定巻頁」「柳全巻頁」と略記し、新村記念財団編『新村出全集索引』（筑摩書房一九八三）所収年譜、柳田国男研究会編『柳田国男伝』（三一書房一九八八）別冊年譜による場合は、「新全年譜」「柳伝年譜」とした。

*翻字者注は「」により示した。

*判読不能箇所は■とし、翻字が候補にとどまる場合は？を付した。

1. 明治四四年三月二六日（封書 四つ折のカード状の用紙、封筒欠）

拜啓 平日はご無沙汰のミ仕た、御海恕被下度候 桑木君より屢御尊承居欽仰不能にても小吏生涯ハ京都あたり迄も往来するを得不得拜眉の機を

求めかね候 先頃芸文にて鷹の御話⁽²⁾を拜読昨夕又心の花にて紀元節古歌に關する御聯想談⁽³⁾をよみて突然なから一書さし出候 ご承知かもしれす候 日光の一部落ニ「久次良⁽⁴⁾」と申地名久しく奇異に感した処 さらに海遠き所ニ同じ地名二三を見出でて候

常陸真壁郡新治村大字久地楽⁽⁵⁾

因幡岩美村志保美村 同 久志羅

其他も書とめ置候もの今見出 すくにあとより可申上候 海岸なるハ

出雲能義郡荒島村大字久白⁽⁶⁾

石見美濃郡吉田村 同 久白⁽⁷⁾

などの外大隈の海岸ニ串良濱有之候 クジラにて諸国の串、久慈などと同じく今ハ「コツ」「コト」と転じたる韓語の串にて岬端の義なるべしと考へ候も渡会氏の俱知の説と共に「ラ」の字好解を得ず候 或は別ニ一種の物の名なりしかもしれず何とそ此上も御留意被下度候 尤も京以東の国々ニは山上にて鳥を捕ふるの風ノ地名となりて存留し「タカヤド」など申所も候へばもし「ワタリダカ」を捕へし地にて「クチラ」と称するならハ甚おもしろく鯨にてハ何分説明しかね候 実は小生ハ諸国辺土の地名を集め地形と比照して死滅したる古国語を発掘し、かねてハ古代人の生活を探り申度心かけ色々々の材料より各大字内の字小字、ホノキ、名處などをあつめをり候 其中ニて注意すべき地名とハ見ながら如何にするも由来を明にしがたきもの二三十をもちをりこまりをり候 「クチラ」も其一にて外にハ

一、ハマ、諸国にて「ハマイバ」と云ふ地名の多きは「ハマ」の齋場又ハ射場にてハマとは今日も小兒正月の遊びニ木、縄など丸き輪を射るものハマ弓、ハマ矢と申すと同じからんと存候も 何が故に右を「ハマ」と申にや考不得

一、コハ清水、強清水の地名諸国ニ多く候テ此コハ（ワ）の字わかり不申。清水ハ必ず有之候ガ「コハ」には何か意味あるべしと存候

一、カレイ沢 多くハ中仙道のそれともしやうな場所にて又カレイ川、カレイ沢有之候

一、トウマイ、東鑑などニ始まれる東北の地名にて今も多く候 陸前登米郡等

一、石名坂、同上、而して分布甚ひろく候

かゝるもの外にも色々有之候 近頃段々ニ国内諸地方の方言集を捜し稍取得候もまだ全国ニ及不能ハす、況や海外の諸語彙の類は書物も手に入らず学力も無之て参照する能ハす候 御迷惑なから時々御教示且御助勢給ハリ度アイヌ語などもバチエラー等ハ語数いかにも乏しき上更に其伝来をたつぬること能ハす候 かゝる単語の比較研究を為すに便なる書有之候ハ、段々ニ手に入候やう御世話被下度朝鮮の語彙も何とぞして追々ニ求め度目下東京の知人ももてるハよりくうつしをり候 さて々々性急なる手紙乱筆ことにおゆるし被下度候 よき本の書名御をしへ被下度候

三月二十六日 柳田国男

新村様

佐々木氏より田中大秀の荏野草子は俱知 etc

(1) 桑木君・桑木巖翼(一八七四—一九四六)。哲学者。東京出身。東京帝国大学哲学科卒。京都帝国大学教授、東京帝国大学教授。専門はカント。

(2) 芸文にて鷹の御話・新村出一九一〇・一〇—一二「鷹狩」『芸文』一／七—九(新全五)。なお、『芸文』は京都帝国大学文科大学を中心とした京都文学会の月刊誌。一年一号(一九一〇・四)より二年三号(一九三二・〇三)まで発行。

(3) 心の花にて紀元節古歌に関する御聯想談・新村出一九一一・〇二—一一「紀元節所感」『大阪朝日新聞』(新全八)、全集付記によれば、後に『心の花』誌に転載されている。

@本書簡は消印や年次を欠くものの、「鷹狩」「紀元節所感」への言及から明治四年と推定される。

2. 明治四五年三月一八日(書簡一枚、消印：荒神口四五・三・一八 宛先：京都帝国大学文科大学 新村出殿 差出：内閣記録課長 柳田国男)

拝啓去ル十四日付ノ御書面拝誦仕候 就而ハ本月下旬頃ハ土曜日ノ外大抵ハ在京ノ豫定ニ御座候あいだ 御光来被下度 若し小生不在ノ際トモ 御支障無之様致居候 先ハ不取敢右廻答迄如此御座候故 恐々

三月十八日 柳田国男

新村出殿

@新村の内閣文庫閲覧の依頼に対する回答と思われる。ある春の日、内閣文庫の資料閲覧後の新村が、柳田の紹介で「島崎藤村と同席し浅酌飲談」したのは(新全一四・五五五)、あるいはこの頃のことか。

3. 大正二年四月二〇日(絵八ガキ「足利之昔」消印：足利二・四・二〇 宛先：京都帝国大学図書館 文学博士 新村出殿)

〔表〕大正二年四月廿日 足利学校探査の序に

〔裏〕長林寺にはたくさんの肖像有之候 中島信虎⁽¹⁾ 柳田国男 後藤朝太郎⁽²⁾

(1) 中島信虎(一八六九—一九二三) 経済学者。東京帝大卒。東京農大、東京高師などに勤める。

(2) 後藤朝太郎(一八八一—一九四五) 言語学者。愛媛県出身。東京帝大言語学専攻卒。中国語学を専攻し、中国通として知られ、『支那風物誌』(一

九四二) など百余冊の中国紹介書をあらわす。

@大正二年四月一九二〇日、考古学会遠足として足利訪問。柳田一九一三「考古学会遠足」『郷土研究』一／三(柳全二四・二七〇)

4. 大正二年八月二〇日(絵八ガキ)『Bern und Die Alpen』 消印: 15-16

20-VIII 1923 BERNI BRIEFVERSAND 宛先: Kyoto, Japan 大日本国京都府上京区下町夷川上ル 新村出様)

御無沙汰をしてゐます、もうそろそろうつる時になりましたので日本のことばかり考へてゐます、スイスで成瀬さん⁽¹⁾とあひまして噂をし候てゐる処です 八月二十日ベルンにて、柳田国男

ほかにも京都農科橋本博士⁽²⁾も一所です

遙かニ御健康ヲ祝ス何レ京都にて御目ニ掛ルべく候

偶然ベルンで柳田君に御めにかかり御噂を致しました。これから独りでデュネーヴを経てバアゼルへ出て、ハイデルへ詣り、本年中に帰朝のつもりです。 八月廿日 無極

(1) 成瀬さん…成瀬清(無極)(一八八四—一九五八)ドイツ文学者。京大帝大文学部教授。

(2) 京都農科橋本博士…橋本伝左衛門(一八八七—一九七七)。農業経済学者。京大帝大農学部教授。

5. 大正三年二月二日(絵八ガキ)『Fierze』 消印: 牛込三三・二二二

一 宛先: 京都市上京区小山中溝町十九 新村出様)

此文集⁽¹⁾うつくしい本にて世に出でよろこばしく候(殊に写真版立派に候)今熱心に拝見いたしをり候処に候 其うちに新聞へご紹介仕度存居り

毎々御好意にてかゝる有益なる書物を賜り厚く御礼申上候

十二月十九日 東京 柳田国男
改造社の人申候大へんよくうれ候よし

(1) 此文集…新村出一九二四・一二『南蛮更紗』改造社

6. 大正一四年九月一八日(封書)東京朝日新聞社用箋七枚 消印: 九・一

八 宛先: 京都帝国大学 図書館 新村出大人 侍史 差出: 東京朝日にて 柳田国男 封筒裏側に新村朱筆「大正十四年九月二十日見」)

御手紙有難く拝見 小川さん⁽¹⁾曾て書いてもよいやうに申されし由に候へ

共 又他の題目にてもよろしく何とそ一応御依頼被下度希上候 南蛮廣記⁽²⁾ 本日岡君から頂戴 有かたく御礼申上候 カモエンスの物語なども重ねて御採録候と存候二見あたり不申残念に存候 此次御目にかゝり候

折 御署名を乞度願上候 早く拝見し度為に御催促がましく申上恐入候 御稿ハ可成初号に間に合せ度候は小さいもの、御出来次第一つづ、早く御送り被下度候 昨日鹿兒島在住の米人宣教師ブル氏⁽⁴⁾来訪相談有之候ハ同氏十何年の間毎年沖繩に渡り伝道しをるにうちに 例のベッテルハイム⁽³⁾の伝を研究せんと思ひ立ち 方々心当りの地方の新聞に広告して

漸く米国某地在住の遺族(未知の)より日記書翰等大分借出し得候よし、来年五月はベッテルハイム翁渡琉(或ハ死後?)八十年のよしにて記念会を沖繩に催すべく其前に簡単な英文和文二種の伝を刊行し度よし

(英文の方ハジャパンエバンジエリスト本年二、三、五月号にあるよしに候 自信のあるものなりと申候)しに候然るに右のベッテルハイム自筆資料ハ不遠持主に返却するともう一寸再び手に入る見込なきに付 何とかして此際一本のコピーなり共 日本に保存し置き度候が右ブル氏世話の下に鹿兒島にて之を写取らしむべき費用出途無之候 二百円内外

のことならば其本の値として貴図書館にて御支出の見込ハ無之哉、日記には当時の史料となすべきもの少からかざるよし東恩納君⁽⁶⁾なども認め候よし如何にも雲煙過眼視するが惜く候為相談申上候 尚金高見積を立て、ブル氏より申来る筈に候へ共 前以て御一考なし被下候ハ、大なる幸に候 尚家は目下引込思案にてとても見込無之候

柳田国男
新村大人御次

(1) 小川さん・小川琢治(一八七〇—一九四一)。地理学者。和歌山県出身。

東京帝大理学部卒。農商務省、京大文学部を経て京大理学部教授。

(2) 南蛮廣記・新村出一九二五・〇九『南蛮廣記』岩波書店

(3) 岡君・岡茂雄(一八九四—一九八九)か？

(4) ブール氏：Earl Rankin Bull(一八七六—一九七四)。メソジスト派宣教師。

(5) ベッテルハイム：Bernard Jean Bettelheim(一八一—一八七〇)。プロテスタント派の宣教師。琉球で最初の伝導者。

(6) 東恩納君・東恩納寛惇(一八八二—一九六三)。歴史家(沖縄史)。沖縄県出身。東京帝大文学部史学科卒。

7. 昭和三年一月二日(封書)折紙二枚 消印：砧村三・一・二一 宛先：京都市上京小山中溝町十九 新村出様 侍史 差出：東京市外砧村喜多見 柳田国男

東方言語史叢考⁽¹⁾一週間ほど前加賀町の宅へ来て居りました 厚く御好意を御礼申し上げます 急いで拝見したい問題が多いのですが中々進みませんので取敢ず御礼を申上ます ○岨をハエ、ハチといふことハ面白いと思ひます、九州で(殊に南部)ハエと謂ふ地名は何十と無く五万分之一地図に出て居ます「八重」といふ字なども宛て、あります御覧になるとよ

くわかりますが何れも山側や、上方の傾斜面のことです、後狩詞⁽²⁾記にも書いておきましたハチは関東以北に多く、崖の上の平場です、但し是ハアイヌ語のパケで、前の語とハ関係が無いだらうと思つて居ます。此序に岩の多い所をヒシといふ例は例の日本アルプス地方にも多く蕞の實も同じで尖つたもの、名と思つて居ます、それと暗礁のヒシとは関係の無いと思ふことハ沖縄でも文書ニハ之を瀬と書いて居て旧音「セ」だからです、干瀬の他に花瀬、大瀬ともいひ、八重山の旧記にハ珊瑚岩で垣を作ることを「大瀬取繞らし」と書いて居ます

一月二十一日 柳田国男

新村大人 侍史

(1) 東方言語史叢考・新村出一九二七・一二『東方言語史叢考』岩波書店

(2) 後狩詞記・柳田国男一九〇九・〇三『後狩詞記』私家版

8. 昭和四年五月一日(絵ハガキ)「熊本百景 江津川女夫石付近の景」消印：牛込四・五・一八 宛先：京都帝国大学図書館 新村出様⁽¹⁾本を一冊さし上ます 先日折口君⁽²⁾が御入用かどうかをたづねてくれと言つてもつて来てくれたものですが、御尋申すを忘れましたから兎に角さし上ます、重複しますなら小生がほしいのです 此月下旬に岡書院の主人⁽³⁾へ御預けしたと申してゐますからよろしく
五月十七日 柳田国男

(1) 本：折口信夫一九二九・〇四『古代研究(民俗学篇之一)』もしくは『古代研究(国文学篇)』(いずれも大岡山書店)を指すか。

(2) 折口君：折口信夫(一九八七—一九五三)。詩人・国文学者・民俗学者。大阪府出身。國學院大學卒。慶応義塾大学、國學院大學で教鞭を執る。

(3) 岡書院の主人・岡茂雄(一八九四―一九八九)。編集者。長野県出身。岡書院、梓書房を経営。

9. 昭和四年一月一七日(封書・折紙三枚 消印:東京中央四・一一・一八宛先:京都市上京区小山中溝町十九 新村出様 侍史「鉛筆書 11月17日 差出:東京市外砧村成城学園前 柳田国男」)

十二日と十三日とは五時前後御出被下候と御伝申候ひしも 十四日ハ雨のために出社不致行ちがひ残念に存候尾高君⁽¹⁾にも昨日面会いたし候て色々協議乃上(方言集の著者等ハ非常にいそぎをり候も) 初次の四冊中に二冊ハ方言問題以外の論著を交へねばならずと申候ことに相成り是が中々厄介なことに有之候 御伝可申候には貴台御著何卒御看手たまはり度御都合一寸御聞かせ被下度希上候 尚拝顔を得候はゞ一つ申上度居候ひしは先日外山君の宅にて藤岡神保⁽²⁾二君に逢ひ此話をいたし候折 言語学叢刊⁽⁴⁾といふ名何か甘心せぬやう二君共に申され候 或ハ全然「学」の字にふれぬ例へハ甲寅叢書等の佳名ハ有之まじくや 是も亦御考慮被下度 尚芸文⁽⁶⁾は時間出来次第 方言研究のエチュドめきたるもの御掲載を乞度候御誌既出中言語に関する論文出でをり候もの御惠贈を得候は、幸に候 薩道先生景仰録⁽⁷⁾ハ拝見仕りまだ伊藤君⁽⁸⁾へも御礼申出ず候がよき企てと存候 今度印刷等に付て微細のことにも意見申述度存居候 本日珍しく秋晴 小田原急行沿線居住者の雑談会と申候もの拙宅に有之候為 忽卒意を尽し得ず候 御令内様よろしく御伝へ被下度候 恐々謹言 十一月十七日 柳田国男 新村大人 侍史

(1) 尾高君:尾高豊作(一八九四―一九四四)か。郷土教育家・出版人。埼玉県出身。東京高等商業学校卒。一九二五年に刀江書院を創業。一九三〇

年の郷土教育連盟設立に関与。兄弟に法哲学者・朝雄(一八九九―一九五六)、美術史家・鮮之助(一九〇一―一九三三)、社会学者・邦雄(一九〇八―一九三三)、揮者・作曲家・尚忠(一九一―一九五二)がいる。

(2) 藤岡君:藤岡勝二(一八七二―一九三五)。言語学者。京都府出身。東大博言学科卒。東大教授。

(3) 神保君:神保格(一八八三―一九六五)。国語学者。東京出身。東大言語学科卒。東京高師、東京文理大など歴任。

(4) 言語学叢刊:じっさいには「言語誌叢刊」として柳田国男一九三〇『蝸牛考』(刀江書院)など一二タイトルが刊行される。

(5) 甲寅叢書:一九一四年(甲寅年)、出版界の営利主義により学問的良書の出版が困難となったことを憂えた柳田が、新村らの友人たちと企画した叢書。柳田一九一四『山島民譚集』(甲寅叢書刊行会)など五タイトルを刊行して頓挫。

(6) 芸文:1の(2)参照。

(7) 薩道先生景仰録:新村出一九二九。一一『薩道先生景仰録―吉利支丹研究史回顧』(ぐろりあそさえて(新全五所収))

(8) 伊藤君:伊藤長蔵(一八八七―一九五〇)。ぐろりあ・そさえて社主。兵庫県出身。東京高等商業学校卒。貿易業を営む傍ら、愛書家向けの出版業を展開。日本最初のゴルフ雑誌を発行したことも有名。

10. 昭和五年一〇月六日(柳田自製絵八ガキ「自邸航空写真」 消印:五・一〇・六 宛先:京都市上京区小山中溝町十九 新村出様)

秋清の候御閑適よろこび存候 此十二日御上京のことと存じ十一日夕を以て方言協会を開くことに寛君⁽²⁾を煩し置 当日ハ橋本君⁽³⁾も話をせられ候是非御くり合せ有之度候

(1) 方言協会:方言研究会を指すか。なお、昭和五年一〇月二日に学士会

館にて開催された方言研究会例会において柳田、橋本が報告している（『学
界消息』一九三〇・一一『民俗学』二／一一）

(2) 寛・寛五百里（生没年未詳）。国語学者。

(3) 橋本・橋本進吉（一八八二—一九四五）。国語学者。福井県出身。東京
帝大言語学科卒。東京帝大国語学教授。

11. 昭和六年四月某日（柳田自製絵八ガキ「自邸航空写真」消印不詳 宛先：京
都市上京区小山中溝町 新村出様）

方言研究会の御創立愉快に存上候 十二日頃御上京のことハ承候へ共

小生ハ四五日中に旅ニ出申候より残念ながら此度ハ御目にかゝり不得候

雑誌計画のこと東條君より御き、被下事と存上候 委員野沢君⁽⁴⁾学士会

御宿へ御尋可申上御逢被下候ハ、幸いに候

五月上旬帰途し京都へ参り可申候

(1) 方言研究会・新村と吉澤義則（一八七六—一九五三、国語・国文学者、
京大教授）を中心に創設された近畿国語方言学会を指すか。一九三一年五

月一〇日の発会式に出席した柳田は「言語と農民生活」を講演しており（柳
伝年譜）、このハガキはその相談かと思われる。

(2) 雑誌計画・一九三一年九月創刊『方言』（春陽堂）。創刊にあたっては柳
田、東條操、橋本進吉らが尽力する。

(3) 東條君・東條操（一八八四—一九六六）。言語学者。東京出身。東大卒。

(4) 野沢君・野沢虎雄（生没年未詳）。長野県出身。一九二七年、砧村（成
城町）に新築された柳田邸の文庫番として岡正雄とともに柳田邸に同居す
る。

@近畿国語方言学会の設立年から推定した。

12. 昭和六年八月二〇日（柳田自製絵八ガキ「書齋」大阪市大新村文庫蔵の柳田
国男一九三一・〇七「厄介及び居候」〔『社会経済史研究』一／二〕に貼込 消印：

東京・砧六・八・二〇 宛先：京都市上京区小山中溝町十九 新村出様）

厄介考ハ「社会経済史研究」一卷二号（年四回）に出し申候 少し資料
が足らぬやうにも被存候 御批正願上候 九月御上京の頃は金田一君⁽¹⁾八
角君⁽²⁾に御出を乞ふて候

御入室様によりしく御伝へ被下度候

(1) 金田一君・金田一京助（一八八二—一九七二）。言語学者。岩手県出身。
東京大学言語学科卒。國學院大学、東京大学を歴任。アイヌのユーカラ研

究を大成。文化勲章受章。

(2) 八角君・八角三郎（一八八〇—一九六五）。海軍軍人、衆議院議員。岩
手県出身。新村の妻の姉妹が八角に嫁いでおり、新村と八角は義理の兄弟
にあたる。

12. 昭和六年九月三日（柳田自製絵八ガキ「自邸航空写真」消印・東京砧六・九

二三 宛先：京都市上京区小山中溝町十九 新村出様）

貴兄御出を待ち不得今晚小集を催をり候 清談又湧候
九月二十二日

柳田

金田一京助⁽¹⁾

八角三郎⁽²⁾

池上隆祐⁽³⁾

北野博美⁽⁴⁾

折口信夫⁽⁵⁾

中道等⁽⁶⁾

(1) 金田一京助・12の(1) 参照

(2) 八角三郎・12の(2) 参照

(3) 池上隆祐(一九〇六―一九八六)。教育者、政治家。長野県出身。東京帝大卒。松本市議、衆議院議員など歴任。

(4) 北野博美(二八九三―一九四八)。編集者。福井県出身。折口信夫に傾倒。

『日本民俗』誌等を編集。

(5) 折口信夫・8の(2) 参照

(6) 中道等(二八九二―一九六八)。民俗学者。宮城県出身。八戸中学中退。横浜市市民博物館長など務める。

@昭和六年九月二二日、「松本市」話を聞く会」分会を自宅で開く(柳伝年譜)

14. 昭和八年四月二二日(柳田自製絵八ガキ「自邸の庭で草取り」 消印:東京・砧八・四・三二 宛先:京都市上京小山中溝町 新村出様)

過日は御繁多中不拘■御来駕感謝仕候 沓岐の山口麻太郎君ハ出発延

引二十九日郷里を立つよしに付御直に会ひ申すまじく候 尚来がけに参

会しうるやを申越み置候 且つ御好意を伝へ置候

令室よろしく御伝へ被下度候 段々御■恐悦無限候

(1) 山口麻太郎(二八九一―一九八七)。民俗学者。長崎県沓岐島出身。沓

岐郷土研究所を設立。

15. 昭和八年一月四日(封書:折紙一枚 消印:東京砧八・一一・四 宛先:

京都市上京小山中溝町十九 新村出様 侍史 差出:東京市外砧村 柳田国男)

荒川翁終に御長逝被成候よし承り嘆息仕り候 令室様御落胆御いたはし

う御同情申上候其後御咳気は如何におはし候哉この十一日の会は斎藤茂

吉君親友平福画伯の死後の為に参同し不得と申来られ候に付延期可計寺

田氏へも通知申置候此次十二月一月は果して大兄御上京被成候哉なども

存しかね候に付改めてもう一度御予報を乞ふこと、いたし置候 近藤江

二君にもなほ宮崎君にもよろしく願上候

柳田国男

新村大人 侍史

(1) 荒川翁:荒川重平(一八五〇―一九三三)。新村出の岳父。昭和八年一月二五日逝去(新全年譜)。

(2) 斎藤茂吉君:(二八八二―一九五三) 歌人。精神科医。山形県出身。アララギ派の中心人物。

(3) 平福画伯:平福百穂(一八七七―一九三三)。日本画家。秋田県出身。アララギ派の歌人としても活動。昭和八年一月三〇日没。

(4) 寺田氏:寺田寅彦(一八七八―一九三五)。物理学者、随筆家、俳人。東京出身。東大物理学科卒。

(5) 近藤江二君:未詳

(6) 宮崎君:未詳

@新村出、柳田国男、吉村冬彦(寺田寅彦)、斎藤茂吉の随筆を集めた『現代日本文学全集 第五八篇』(改造社一九三二)の刊行を期に四人の会合を企画したもの、斎藤茂吉が旧友・平福百穂の訃音に接したため、流会となつた件についての書簡。この出来事は、柳田「俳諧と俳諧観」「柳定七」、新村「随筆の名義」「新全一三」でも触れられている。

16. 昭和九年二月二五日(封書、二枚、消印:(局名判読困難)九・二・一六 宛先:

京都市上京小山中溝町一九 新村出様 親展 差出:東京市外砧村 柳田国男)

漸く東京も梅が咲きはじめ申候か 御あたりは如何 又風は御引被成ず候哉 我方は大部分厄にかゝり完全なる冬籠りを致しました さて昨年の九月より毎週一日づつ小著「民間伝承論」⁽¹⁾の筆記を後藤興善君に頼ミ候際 傍聴者十余人有之何れも小生が私案に従ひ全国的に積極調査⁽³⁾の行脚を試ミんと決意いたし候に付 色々案をねり各県一以上の最も世に知られざる山村の習俗慣行を今後三年の間に調べて見ることに致し其経費の補助を學術振興会に申請仕候 貴堂最近に委員を御抜け被成候ハ力落しに候へ共幸ひに瀧委員長を始め東京の諸氏にハ其趣意を同情を以て御聴取被下候羽田教授にも御差支なくば御可認被下候やうに内々御口添を給ハリ度願上候 是だけ多又有為の青年(皆学校を出た人々にて候)が揃ひ候ことも珍らしく一方山村も急激ニ変化しつゝある折柄故 小生もまだ少しは働けるうちに年頃の計画を実現し度望に候 案外な収穫有之べしと存候 右御願迄如此申候 恐々頓首 二月十五日 柳田国男 新村大人侍史

採集ハ小生持論に従ひコトバを標準にするべきも方言も多く現れ来るへしと存候

(1) 柳田国男一九三四・〇八『民間伝承論』共立社。
(2) 後藤興善(一九〇〇—八六)・民俗学者。兵庫県出身。早稲田大卒。
(3) 山村調査…正式名称「日本僻陬諸村に於ける郷党生活の資料蒐集調査」。一九三四—三六の三年度にかけて実施。柳田の主催する「郷土生活研究所」の同人が調査を担当。柳田の編んだ百箇条の調査項目を掲載する『郷土生活研究採集手帳』を基準とすることにより、比較研究の基礎をなす資料蒐集を目指す。調査者から寄せられたこの手帳は成城大学柳田文庫に所蔵され、また、報告書として柳田国男編一九三七・〇六『山村生活の研究』(民間伝承の会)がある。

(4) 瀧精一(二八七三—一九四五)。東洋美術史家。東京出身。東大卒。東

大教授。雑誌『国華』主幹。
(5) 羽田亨(二八八二—一九五五)。東洋史家。京都府出身。東大史学科卒。京大教授、京大総長など歴任。

17. 昭和九年二月二〇日(柳田自製絵八ガキ「自邸の庭にて」 消印・東京站九・二〇 宛先…京都市北区小山中溝町十九 新村出様)

御手紙有かたく候 二十六日は夕方まで朝日にて御待可申上候 鈴木虎雄君にも山村生活調査⁽²⁾のことを御話被下度願上候 二月二十日講義のことハまだ承り不申候も可成御うけ可申候

(1) 鈴木虎雄(二八七八—一九六三)。中国文学者。新潟県出身。東大漢学科卒。京大教授。
(2) 16の(3) 参照

(3) 柳田は京大文学部神道史講座(京都府神職会の寄付講座)にて昭和九年「民間の信仰」および一二年「民間信仰と慣習」の集中講義を行っている。

18. 昭和九年四月四日(柳田自製絵八ガキ「自邸の庭にて」 消印・東京站九・四・宛先…京都市上京区小山中溝町十九 新村出様)

漸く我々の季節になりました 四月の御上京の日が早くわかつたら再び寺田齊藤二君にも通知をしましょう 成るべく早く早めに決定を乞ます 私の講義ハ春秋二度に一日おき二二時間づゝの時間わりに願度と存します 春ハ五月頃に趣^マくことを望んでゐます何とぞよろしく

(1) 寺田寅彦。15の(4) 参照

(2) 齋藤茂吉。15の(2) 参照

(3) 京大での集中講義。17の(3) 参照

19. 昭和九年八月一〇日(柳田自製絵八ガキ「書齋にて木曜会同人と一緒」) 消印:
東京站九・八・一〇 宛先: 京都市上京小山中溝町十九 新村出様

暑中皆様御さほりも無く候哉 さて葡領東印度の親日有力者 Van der
Pon⁽¹⁾大この十二日に御地に参候 面会を求め来り候ハ、一度ハ逢被下度
候 此人ハ過去十四年間日本史日本語を研究しもう一度両国共同の文化
協会を復活し度為に来朝せし人に候 小生ハ同氏東留時代の旧知に候
八月九日

「追伸」尚々右ブル氏ハ神戸の例のチャローズ⁽²⁾のことも知りを取り候
多分同領事殿三十二日頃迄ハ居り新村氏御逢被下候は、再上洛して
もよろしきよし申居候 是といふ御厄介ハかけ申ましく候ニ付以前の日
葡通交調査会⁽³⁾の御縁深きにて一度御会談被下候ことを小生より願上候
国男

(1) 未詳

(2) 未詳

(3) 大正六年末に「日蘭親交の由来を繹ね、両国の国情を詳にし、今後益誼
を篤うする方法を考究」するために設立された民間団体(岡谷公二 一九
八五『貴族院書記官長 柳田国男』筑摩書房 一三五)。柳田やその弟・松
岡静雄が関与した。

20. 昭和十一年一月二七日(封書:折紙一枚 消印:東京・站一一・一・二七
宛先:京都市上京小山中溝町十九 新村出様 侍史 差出:東京市外站村 柳田国男)
不慮の御災害御不在中にて嘸々御困り被成候こと、御状況拝察仕候 本

とうなさきの事はわからぬものと承歎仕候 跡始末は色々の御氣遣ひお
はし候べく御辛勞御痛はしく存上候 寒さの折柄御障りなからんことを
祈るのみに候 さてしも御損害の小区画に止りしこと迄学問の為の大慶
と存上候 先ハ御見舞のミ 恐々謹言
一月二十七日
柳田国男
新村大人 侍史

(1) 重山文庫所蔵稿本「新村出自選年譜」に「昭和十一年一月、附属図書館
閲覧室失火之為全焼」とある。

21. 昭和十一年六月三〇日(封書:折紙二枚 消印:東京站一一・六・三〇 宛先:
京都市上京区小山中溝町十九 新村出様 御答 差出:東京市外站村 柳田国男)
久しく御見舞も申上げません皆様何の障りも無く悦しく存し上げます
さて「オツリ」のことは雑誌「民族」三卷二号(昭和三年一月号)⁽¹⁾ニ少
し書いて見ました後、あまり進んで居りません 鄙見では「釣り」とい
ふ語と関係があらうといふのです。即ち海老で鯛をツルなどといふツル
で、少しの物を出し多くの物を取る意味と解します故オのツリの方が本
意に近く釣銭の方は後の出現かと思ふのです 実際「オツリ」の他の方
言は数多の又大領域をもつて居ます(カヘシ、ハネツリ、ウハコ其他)
其抜刷が半行?しかありませんからあの雑誌を御覧を乞ひます なほカ
チカチ山考⁽²⁾と牛腸考⁽³⁾の一評を乞ふべく別封にてさし出しました なほ此
序に御耳に入れ且つ願ひたいことが二つあります

一、九月中ごろから近畿民俗学会が大阪の懷徳堂を借用して毎週一回二
十五回ほどの連続講演会を開かうとして居ます どうか一つ積極的支持
を願ひ度発会式典に御出下されることが出来ると非常な仕合せです 尚

詳しくハ委員から申上げます

二、松岡静雄の「ミクロネシア語の総合研究」⁽⁶⁾は八十部だけ自費刊行をして其印刷費をまだ払はずに没しました。是を五百ほど刷り全国の高等学校及び大きな図書館等に寄贈する金を(千円以内)どこかの奨学団から補助してもらひ度。小生からは一寸申しかねます故一つ御口をきいていた、き度。尚金田一君⁽⁷⁾にもたのむ考です

奥様によるしく 六月二十九日 柳田生

新村大人御答

(1) 柳田国男一九二八・〇一「交易と贈答」『民族』三/二

(2) 柳田国男一九三六・〇二「かちく山考」『文鳥』六

(3) 柳田国男一九三五・一一「午餉と間食」(『高志路』一/一一)に

「ゴチョウ」の語の考察があり、これを指すか。

(4) 近畿民俗学会主催、大阪府、大阪朝日新聞社後援「日本民俗学二十五回

連続講演会」。懐徳堂を会場として一九三六年九月より翌年四月まで開催。

新村も一月八日に「二三の草木に関する民間伝承」(新全一一)を講演し

ている。

(5) 松岡静雄(一八七八—一九三六)海軍軍人、言語学者、民俗学者。兵

庫出身。柳田国男の次弟。海軍在役中の一九一四年、ミクロネシアのド

イツ領ボナベ島の占領に従事。退役後、太平洋諸島の研究者となる。

(6) 松岡静雄一九三五『ミクロネシア語の総合研究』岩波書店

(7) 金田一京助・12の(1) 参照

22. 昭和十一年七月二三日(封書)折紙二枚、消印:東京站:一一・七・二三

宛先:京都市上京区小山中溝町一九 新村出様 御返 差出:東京市外砧村 柳田

国男)

東京にて御けがなされしやうに心得学士会へ電話などかけ候ひしも消息不承得御案し申居候。もはや御平復なされ候にや御大切に遊され度候

さて御親切に御返などかつて凶弟遺著は古い「ミクロネシア民族誌」⁽¹⁾のことにハ無之昨年出版せし「ミクロネシア語の総合研究」⁽²⁾といふ大冊のものに有之候。是を自費にて八十部だけ印刷し組版印刷所に在りて全部借金になりをり候もの候。小生も半分ほど読み候に結論も方法も日頃似ず穩健に有之。たとへ此ま、は承引せられぬまでもその整理せし源料と考へ方とハ参考の価有之と存候。能ふべくは数百部を刷り増して図書館や大学等にも保存してもらひ度と存し候。家人の言にてハ当時新村橋本金田一⁽³⁾の三先生へハ拝呈せしやうに申候がもしまだ御目にふれずハ手元に余部も有之候故是非御一閱を乞度候。泉井小林⁽⁵⁾(英夫⁽⁶⁾)の二君には小生よりさし図いたしたしかに御届け申有之候。斯やうの刻苦の書せめてもう少し世に知らしたき念願なれと骨肉としてハ直接にかゝる要請も遠慮せられ候に付。何とかして貴大人に代りて御発言を乞度仕候。大よそ一冊二円位にて三百部も買上げ進候へばそれで此方の借金ハかたつき申候。尚詳しくハ御下聞をまちて御答申上へく候。

七月二十二日

新村大人侍史 柳田国男

(1) 松岡静雄一九二七『ミクロネシア民族誌』岡書院

(2) 21の(6) 参照

(3) 橋本進吉…10の(3) 参照

(4) 金田一京助・12の(1) 参照

(5) 泉井久之助(一九〇五—八三)。言語学者。大阪出身。京大言語学専攻卒。

京大教授。専門は印欧語研究。

(6) 小林英夫(一九〇三—七八)。言語学者。東京出身。東大言語学選科。

京大教授。ソシユール研究・翻訳で有名。

23. 昭和十一年九月二日(柳田自製絵八ガキ「散歩にて」 消印:東京站一一・九・

二一 宛先:京都市上京小山中溝町十九 新村出様

昨日ハ雨であるけませぬ為に御好意をい、ことにして長坐いたしあとで御困りに被成ずやと大いに氣にとがめ申候奥様にいろく御心配を御かけ申取分恐縮に居り申候 よろしく御礼ねかひ上候

九月二十二日

風位考ハ既に御覽被下度と存し候かもし二重になり候ハ、誰かに御分かち被下候

(一) 柳田国男一九三五・一二「風位考」國學院大學方言研究会編・発行「風位考資料」

@柳田は昭和十一年九月一日、大阪懷徳堂で開催される日本民俗学二十五

回連続講演会の開会の辞を述べており(「政治教育のために」柳全二九)、その翌々日、新村邸を訪れたものと思われる。

24. 昭和十二年三月九日(柳田自製絵八ガキ「自邸ペランダにて」 消印:砧二一・

三・九 宛先:京都市上京小山中溝町十九 新村出様

私は十年以上も紙をすく処を見てみませんので書くやうな印象がありませんが、倉田君⁽¹⁾始め同人の経験をもつ者にハ是非何か書くやうにす、めます、木曾の紙漉歌の意味ハ土地の人ニたづねてやりました 御返事をする筈です 三月九日
談叢ハ落手今拝見してゐます

(一) 倉田君:倉田一郎(一九〇六―四七)。民俗学者。国語学者。富山県出身。

日本大学国語漢文科卒。郷土生活研究所同人、山村調査に参加。

(二) 談叢:和紙研究会編・発行一九三七・二「和紙談叢」。新村出「和紙外

聞抄」(新全九)を収める。

25. 昭和十二年七月四日(絵八ガキ「史跡医王山国分寺三重塔」 消印:高山二一・七・? 宛先:京都市上京小山中溝町十九 新村出様)

この塔裾細にて形めづらしく存候 高山ハまだ人の心もちに古風を存じ生活もや、休息多く候 特色の一つハ春秋の花のいろのうつくしきこと、申居候 又学者も多く候 鳥のこゑを聴くには下呂の山の丘にある湯ノ島駅がよろしく季節ハ九月末十月始などよろしからんと存じ候 必ず内君も同伴したまふべく候 是より越中へぬけていよくけふハ帰京の途に上り候

七夕の高山にて 七月四日 柳田国男

@昭和十二年六月二三日から三〇日まで京大集中講義、その帰路に高山に立ち寄る。

26. 昭和十五年一月三日(封書:便箋四枚 消印:一・一・四 宛先:京都市上京区小山中溝町十九 新村出様 侍史 差出:東京都世田谷区成城町 柳田国男)

先日は久々にて拝芝本懐の至に候 昨夜(二日)委員会を開き会者小生他十人坂本文化事業部より補助金受参を決し 次で其使途殊に講演と地方会員の文章募集の事などを議し申居候 尊堂御寄付金に付てハ一同感謝し御礼申述べ候やう託せられ申居候 地方在住の委員に対してハ急遽の案件の外書面を以て表決を乞ひ又前者ハ事後承認を乞ふことに定め申候 名誉会員ハ功を立てさせてから推薦する以外に学位に非ずして此会に関心をもつ大人物、平たくいふなら金を出し助けてくれさうな人に

は前に名誉会員になつてもらふ方がよく無いかと存し候。どうか御賛成被下度候実ハ放送協会、長を入れたき下心に候。文部大臣もと存しをり候。是非ご賛同を得たく候。丹波市記⁽²⁾の出で居るのは郷土研究四巻二号(大正五年五月)にて竹中某の名を用ゐをり候。来年四月頃などの時候の最もよろしき時東京にて公開講演会のや、大きいのを開き度候。一時間ほどの御話は支度被下まじくや。注文を御請け被下るならば「訛」「なまり」といふことに就ての御意見をうか、ひ度し。所謂アクセントの如きハ本でハわかるものでない故。是非耳で聴かしたきものと力説せしことに候。いつかは服部⁽³⁾平山⁽⁴⁾金田⁽⁵⁾一君などにも話題にしてもらひたきものと存じ候。是非御賛成希上候。末の娘⁽⁶⁾を大阪人の息子にやり候為当人東京在住なれとも。先方京阪の親類知音に披露為に媒人夫婦と共に紋付をカバンに入れ六日の日から大阪に参り候。帰途は二千六百年の行事に参列の人とかちあひ汽車の席も得にく、是非なく船にてとときめ申居。其為多分何日もホテルに止り候こと、存じ候。そのうちにどこかで京にもより静かな紅葉をさがしたしと存居候。何やかや取集め失敬。恐惶頓首十一月三日 柳田国男

新村大人 御次

- (1) 未詳
- (2) 竹中贊藏(柳田国男筆名)一九一六「丹波市記」『郷土研究』四／二
- (3) 服部四郎(一九〇八―九五)。言語学者。三重県出身。東大言語学専攻卒。東大名譽教授。アルタイ語族の研究で有名。
- (4) 平山輝夫(一九〇九―)。国語学者。鹿児島県出身。國學院大學卒。東京都立大名譽教授。
- (5) 金田一京助・12の(1)参照
- (6) 末の娘・四女千津(一九一九―)、昭和一五年一〇月二日、太田邦男と結婚(柳伝年譜)

@ 書簡中で触れられている関西旅行については柳伝年譜に記載なし。

27. 昭和一五年二月二五日(絵八ガキ「日本名所 東海道の富士」消印：千歳一五・二一・二七 宛先：京都市上京区小山中溝町十九 新村出様 差出：東京世田谷区成城町 柳田国男)

第二の御随筆も御恵贈有り御芳意奉謝候。野鳥雜記本屋の怠りにてまだ差上げぬうち御求被下恐入候。馬鹿考異見ハ「創元」ニ提灯もちをかねて掲載いたすべく候。少し出たらめにて御擧笑を恐れ申候。御一家よき春を御迎へなされるやう念じ上候。十二月二十五日 杉原紙考の抜刷⁽⁴⁾も有かたく存候

- (1) 第二の御随筆：新村出一九四〇『檀』靖文社か？
- (2) 野鳥雜記：柳田国男一九四〇『野鳥雜記』甲鳥書林(重山文庫所蔵)
- (3) 柳田国男一九四一『日本の言葉』書評『創元』二／二。新村出一九四〇『日本の言葉』創元社を書評。同書は柳田文庫に所蔵あり。この書評は「馬鹿考異説」と改題して一九五三『不幸なる芸術』筑摩書房に収録。
- (4) 新村出一九四〇「杉原紙源流考」『和紙研究』。柳田文庫に抜刷の所蔵あり。

28. 昭和一六年一月四日(絵八ガキ「浅草観音」消印：千歳一六・一・六 宛先：京都市上京小山中溝町一九 新村出様 差出：東京世田谷区成城町 柳田国男)

新正御尊候如何 小生ハ二十九日から風を引き正月ハねてくらし申候御陰にて檀⁽¹⁾は細読いたしたのしく存候。山口の御思ひ出と火のまはりの冒険記と甚だ印象ふかく又と承ハれぬ御ものかたりのやう存候。方言学会ハ二十三日の晩金田一君⁽²⁾の話⁽²⁾を聴くことに致しその前刻に委員会を開

き候 第二報告も貧弱肩身せまく候
一月四日夕

(1) 新村一九四〇・一一『櫃』靖文社

(2) 金田一京助・12の(1)参照。昭和一六年一月二三日、東京帝国大学山上集会所で催された日本方言学会例会で「私自身の方言を省みて」を報告している(『学界消息』一九四一・二『民間伝承』六/五)。

(3) 日本方言学会編集一九四一・二『方言研究』第二輯をさすか。

29. 昭和一六年一月五日(封書)便箋六枚 消印:一六・一・六 宛先:京都市上京小山中溝町一九 新村出様 親折 差出:東京世田谷区成城町 柳田国男

又手紙をさし上げる用が出来ました 既に放送局よりも申上げ候こと、存じます この十二日の夜国語問題二つについての座談会を催したとの相談を受けましたので ちやうど御上京の日取だから是非御列席を願ふやうに私も激励しました 文部省に今度国語課が新設せられ 大岡保三氏(1)の下に倉野吉田(2)(3)その他の新進学者が働らくことになりましたから この際その大岡課長に出来るだけ今の腹を打明けてもらひ それを全国の小学教師の心ある者に聴かせるやうに二といふのが私の意見でありましたが 是もその大岡氏が悦んで引受けてくれたそうです それから今一つ木下左太郎君(4)ハ文士として最近の国語現象に色々の注文と不満とをもちつゝ、今まで一度も放送に出たことが無いのを今度すゝめてこの座談会に参加する気にならせたので是も放送局ハ大悦びです それから御馴染の岸田国士君(5)ハ種々国語について多くの考をもつて居る人だから(さうして人気の多い人だから)是非加はつてもらうやうに二と申て置きましたが 或ハ是だけハ故障が起きるかも知れませんが その場合にハ誰か一人岸田君に紹介推薦をしてもらうことにして置きました 大人にも御健康の

許す限度でどうか御協同を希ひます 私もこの予定で進行するやうだつたら私も出ると申て置きましたが 今日のもやうでハどうやら成立立ちさうであります。私のいふことハ実ハ今までハきつ過ぎるので悦ハれず又自分でも戒めて居りましたら 今度ハ更に謹慎して努めて穩健な実現の出来そうな意見の陳列に産婆したいと念じて居ります(科学するの真似をして見ました)。よい話題話柄、興味ある実例など少し御出し試みなされたら二三日前にそれだけでも謄写版にして分ちたいとおもひます

啓明会の六月の講話の筆記を拝読して非常にはつきりと又力強く今日の国語運動に対するあなたの意見を御示しになつたことを驚嘆して居ります 私にとつては実に望外の喜悅であります 是からも其ういふ機会の又生れんことを祈つて居ります 序に方言学会の事を申上げますが只今の大きな心配は折角会が出来舞台はと、のつても皆が尻込をして何も発表しないで居ること物笑ひに絶りはすまいかといふことです 少しかあとで訂正せられるやうなことでもしく言つてのけるやうな勇気を若い人たちにもたせたいと思つて居ります それで私の在任中に一度ハ大会にて何か御話して下され且つ尻込座の尻を打つことに御手を御貸し下され候やう夙くから願つて置きます 只今の形勢では全く任期を一年にして置いてよかつたと思ふばかりです何の為に学会を作つたらうかといふ感じもしないでハありません どうですもう一働き御一しよに働いて見ようではありませんか なほ拝芝の御願に申上げます

一月五日 柳田生
新村大人へ

(1) 大岡保三…生没年、出身地未詳。教育行政官。

(2) 倉野…未詳

(3) 吉田…未詳

(4) 木下左太郎(一八八五—一九四五)。医学者、詩人、作家、美術史家。

静岡県出身。東京帝国大学医科大学卒。

(5) 岸田国土(一八九〇—一九五四)。劇作家。東京出身。東京帝国大学文学部選科。文学座を創設。大政翼賛会文化部長を務める。

(6) 啓明会の六月の講話の筆記。昭和一五年六月二三日講演。新村出一九四〇・一二「新東亜建設と日本語の問題」啓明会『第百一回講演集』「新全二」。

30. 昭和一六年二月二日(「少林山興龍寺」の絵八ガキ 消印:千歳一六・二・

二一 宛先:京都市上京区小山中溝町十九 新村出様 差出:東京世田谷区成城 柳田国男)

御手札両度拝受御礼申上候 来月ハもう一度御目にかゝり先度の御話を つゞけ度為御時間を御費し被成候ハ、江東水元の方面に御案内申候 「若」の御説ハ甘受いたしかね候御曆代の御譜に久しく此語を使ひしことも御考被成必要可有之候 二月二十一日

@「若」への言及は馬鹿の語源をめぐるやりとりの一端と思われる。

31. 昭和一六年六月二日(絵八ガキ「朝日新聞社」消印:千歳一六・六・二

宛先:京都市上京区小山中溝町一九 新村出様 差出:東京世田谷区成城町 柳田国男)

引続きいつも御元気に被為入候哉 折々八月上京かと存し候も小生も旅行などの為御伺もいたしかね候 さてこの二十八日はいよゝくアクセント問題の公開講演会を開き候 その前後もし御出京の御序も候ハ、一日ぐらゐの御都合ハ御つけ被下度 或ハ無理かとも存候へ共もしやの為申上候 六月二十一日

(1) 昭和一六年六月二八日、産業組合中央会講堂にて日本方言学会公開講演

会開催、三宅武郎「アクセント教育上の一疑問」、金田一春彦「国語アクセントの史的研究」、平山輝男「アクセント分布と一型アクセント」など(「学界消息」一九四一・〇八「民間伝承」六/一一)。柳伝年譜によれば柳田も講演している。昭和一五年一月三日の新村宛書簡にあった「公開講演会」のや、大きいのはこれを指すか。

32. 昭和一六年七月二五日(封書・便箋三枚 消印:一六・七・二五 宛先:京

都市上京区小山中溝町十九 新村出様 御次 差出:東京世田谷区成城 柳田国男)
過般ハ御清閑の日に参り合せ御懇話且つ御歓待好記念に存候 御令室にも何とそ厚く御礼御伝声被下度候 まだ二三申し上残し候うち二さしか、つての一つの内に方言学会ハ九月下旬に委員会を開き退任の御挨拶申上候考に候が後任は多分小生の発案御支持を得ること、存し候何か特殊の御都合が悪くない限り貴堂に御願申上候 尤も自然の進行のやう存し申候 万一同様御困りのやうに候ハ、一寸御内意御示し被下度候 一年だけはやはり御引受仕方あるましく愚考いたしをり候も御同然に年よりは養生の必要も有之候こと故出来るならバあとを御肩の荷にならぬやうに適意に御働かせ申度存念に候 一年ハすぐたち、さう又面倒なものでも無之候 標準語普及に付いても愚案御批評をうけ度存居候ひしも是ハ九月のこと、いたし度候 先日の座談会速記⁽²⁾の上おほしめしも候ハ、一度敬語問題継続したく存居候 あの日の後都ホテルになほ二泊居候のち北陸に遊び氷見の旧布施湖畔に一泊次に小川温泉信州野尻の山荘などに日を送り大雨の翌日帰郷 次の夏中書き上げ度ものも有り候或ハもう一度どこか涼しい処に参るべく存居候 俳句研究の歌仙ハ大人なものに候⁽³⁾ 御目にかけてたく存候もまだ抜刷もくれ不申候故 力不及候恵賜の書は車中全巻拝読大に遺忘を補ひ且つ新たな興味を得申候 是安?御礼申上候 謹言

新村大人御次 柳田国男

(1) 昭和一六年二月一六日(二三日説も) 日本方言学会講演。柳田国男一九四一・〇六「標準語について」「方言研究」三。「標準語普及案」と改題して『標準語と方言』に収録「柳全一八」。

(2) 昭和一六年五月九日、日本方言学会の敬語に関する座談会。

(3) 柳叟(柳田)・迢空(折口信夫)・善磨(土岐)一九四一「東北車中三吟」『俳句研究』八/八(柳全三〇)を指すか?

@昭和一六年七月二五日、柳田、横浜より氷川丸で神戸へ船旅。船中での洋上座談会に参加。帰途、新村と会合したと思われる。この後、富山県氷見郡柳田村を採訪、野尻湖ホテルに滞在して原稿執筆。このあと一〇月まで日本方言学会の会長選に関する書簡が続く。

33. 昭和一六年七月二六日(封書・便箋一枚 消印・判読困難 宛先・京都市上京区小山中溝町十九 新村出様 差出・「印」東京氏世田ヶ谷区成城町三七七 柳田国男)

御細々の御文拜見仕候 御足はもう段々御よろしきこと、存じ候が如何にや 早く夕方などの御そゞろあるきの出来候やう念し上候 方言学会に付てハ測らず御懇ろの御言葉たまはり候へ共 是が当初からのたつた一つの条件に有之又其為に思ひ切つて働くことを得申候 それ故如何なる御話有之候とも断じて翻意せざる決心いたしをり候 徒なる御心配を被下ぬやうニや、先まはりニ一応此点申陳置候 それが又拝訪の趣旨の一つに候き 御諒養被下度候 草々不一 七月二十六日 柳田国男
新村大人 御次

34. 昭和一六年八月二〇日(柳田自製絵八ガキ「書齋にて」 消印・千歳一六・八二〇 宛先・京都市上京区小山中溝町 新村出様)

其後御足部の御懐みハ如何うか、ひ上候 さて本年始公刊せられ候(鳥根県美濃郡)安田村発展史上巻⁽¹⁾に石州半紙の記事殊に詳しく紙漉重宝記の解釈など委曲を極めをりし 又方言比照もありおもしろく候 著者同村矢富熊一郎氏⁽²⁾又ハ同村図書館長矢富義成氏⁽³⁾へ御申入被成候ハ、必ず一部御目につけ申こと、存候 八月二十
九月ハ大よそ何頃御上京にや御つもり御示し被下度候

(1) 矢富熊一郎一九四一・一一一九四二・八『安田村発展史』安田村図書館
(2) 矢富熊一郎(一八九三—?)
(3) 矢富義成・未詳

35. 昭和一六年九月六日(封書・折紙一枚 消印欠 宛先・京都市上京区小山中溝町十九 新村出様 御次 差出・東京世田ヶ谷区成城町 柳田国男)

御脚部の御痛その後如何にや 夏中の引籠御退屈のこと、存上候 九月の会の二十三四日頃ニ講演会、月末又ハ翌月ノ初二委員会の計画をいたしをり候 もし御出かけ可能に候ハ、大よその日取御示し乞度 いよゝ六つかしいときまれハ講演会の序を以て委員会を開き可申候 尤も十五日頃までの状況にて御きめ被下差支無く候 なほ先日或ハ申残候かとも存し候か次期会長選挙のたとへ少しても御意向と反する懸念あらば指名でなく投票にいたし度存候 「以下、新村文庫蔵『喜界島方言集』貼込」喜界島方言集送らせ候も御入手被下候や 是ハあまたの古語の埋もれ居るよき遺物層のやう存候 恐々頓首 九月六日
「追伸(重山文庫所蔵分)」先日ハ御慰問感謝仕候

(1) 柳田国男編・岩倉市郎著一九四一『全国方言集 喜界島方言集』中央公論社(新村文庫蔵)

@紙質、切り取りの形状、内容等から新村文庫蔵『喜界島方言集』の貼込がこの書簡の一部と推測される。

36. 昭和二六年一〇月一〇日(封書:折紙一枚 消印:一六・一〇・一〇 宛先:京都市上京区小山中溝町十九 新村出様 親展 速達 差出:東京世田谷区成城町 柳田国男)

其後御様子如何にや もし幸ひに御上京御かなひ候ハ、東條氏⁽¹⁾より可申上手筈に相成居候も先頃の委員会ハ生憎と出席者少なく四人の幹事の外ハ橋本金田⁽²⁾の二君のみなりし為 先頃京都にてよく承り居り候御心持も他の人々にハ伝へ不得 今の投票の模様(現在貴君ハ、小生四、橋本三、東條一、未五?)にてハ貴堂最多数にて御当選と成るらしき形に候 誰か一人代行者を御指定なされこの一年ハ御引受被成候之他無きかとも存し候に付御一考被下度候 そんなこともあるまじく候へ共小生蔭に居て工作せしやう二でも思召され候てハ困り候故この事情内報申上候 全く幹事委員までが小生の注意を省みなかつた為にこの結果に相成不本意に存居候 恐々頓首 柳田国男
新村大人 侍史

(1) 東條操:11の(3) 参照

(2) 橋本進吉:10の(3) 参照

(3) 金田一京助:12の(1) 参照

37. 昭和一七年一〇月一五日(封書:折紙一枚裏表 消印:一七・一〇・一〇 宛先:京都市上京区小山中溝町十九 新村出様 御史 差出:東京世田谷区成城町 二七七 柳田国男)

御無事御帰宅なされたこと、存し上候 ますこの度はゆるく御話を承はることが出来てしあはせでした石川君⁽¹⁾の方も御話がついて安心しました高藤武馬君⁽²⁾二ハまだ逢つてき、たゞしては見ませぬが東條氏⁽³⁾の手紙によつて大体わかりましたのは私のき、そこなひでハ無かつたといふことです。事実はこの六七月の交にこちらの請求によつて二千五百円を送り来り。今度の御督促によつて残り二千五百円の未進をもついに来たのでありましたのち石川君ハ是を第三年度の金にしてもよからう位に考へて居たらしいのであります。第三年度以降も事業の進行次第まだ出してよいといふ意向を私に洩しそれを私ハ又委員会の人々に告げて置きましたは是は心もとなく又気にもかゝりますから此点はもう私自ら委任を解除いたします実は会へ出て時を費すよりも砧村に引込んで居て独りで働く方が能率が上ると存じもう少し古いノートの整頓に打込みたいと思つて居るのです方言をやや片づけたら其次はメエルだけを専門に楽みたいと思つて居ります 私たちから御内君によるしく御伝へ下さい
十月十五日 柳田国男
新村大人御次

(1) 石川君:未詳

(2) 高藤武馬(一九〇六―?) 文学者。広島県出身。東京帝国大学国文学科卒。雑誌『方言』編集。法政大学名誉教授。

(3) 東條操:11の(3) 参照

38. 昭和一八年六月二四日 以降(柳田自製絵ハガキ「孫娘と」 消印判読困難 宛先:京都市上京区小山中溝町十九 新村出様)
芳信多謝 小生殊懶日ニ加り何かといふと田舎ニ参りたがり 御伺ひも怠りをり候 御車中の御徒然とハ申なからよくも御読書を御つゞけ被成

御根気健羨之至に候 御蔭で卑著⁽¹⁾に止りそれなら強ひてもさし上げられよかつたにと存候 令内によろしく御伝へ被下度候
この写真から又六七年になる大きな方ハ女学校に入り申候

(1) 卑著・柳田国男一九四二『木思石語』三省堂「柳全二三」をさす。

@この絵ハガキは新村文庫蔵『木思石語』貼込。日付は同書刊行日より推定。

39. 昭和二年三月二日(柳田自製絵ハガキ「書齋にて」消印不詳 宛先：京都

市上京区小山中溝町十九 新村出様 「新村朱筆」昭和二十一年三月六日正午接手)

小林英夫君⁽¹⁾から久々の御消息を承り思慕且つ安堵仕候 流離間関とはこのことかと思ふほど誰も彼も遠ざかりしみく敗戦国の嘆きを味ひ居候
いつぞや御勧め下されし「毎日の言葉」⁽²⁾近く本になり候故 その時に御便り申上んと存し居候ところに候 令内に何とぞよろしく

昨日始て鶯をき、申候雲雀ノようくつき果て申尾長鳥のミ沢山に候

三月二日夕

○桑木君⁽³⁾にも罹災後まだ逢不申候

(1) 小林英夫：22の(6)参照。

(2) 柳田国男一九四六『毎日の言葉』創元社。新村文庫に柳田寄贈本あり。

その書込に「婦人公論に連載せられしを、上り下りのツバメ、カモメなどの展望車の書架上よりとりだして安らかによみあぢはししことありけり。著者に語りて、一冊にまとめて出版せられなば御寄贈を受け(た)しといひしことあり」とある。

(3) 桑木巖翼：1の(1)参照。

40. 昭和二年九月二日(柳田自製絵ハガキ「書齋にて書見」消印：判読困難
二一・九・二三 宛先：京都市上京区小山中溝町十九 新村出様 「新村朱筆」昭和二十一年九月廿九日到来)

引つづき御無事御暮し被成候哉存上候 先日朝日で本多君⁽¹⁾に逢ひ 御容子もうかゞひ申候 さて沖繩文化叢説⁽²⁾とも名つくへき文集を作り学問上の関心を喚起したく 十四五人同意戴き 貴兄にも何かごく御心軽く御書き被下まじくや 二十枚内外成るべく八十月一ぱい位二まとめ度 幣原氏⁽³⁾も参加せられ候 中央公論社にて出し申候 奥様によろしく
九月廿二日

(1) 本多君：未詳

(2) 柳田国男編一九四七『沖繩文化叢説』中央公論社 新村の寄稿は実現せず。

(3) 幣原氏：幣原坦(一八七〇—一九五三)。東洋史学者、行政官。大阪府出身。東大国史学専攻卒。東大教授、台北大学初代総長など歴任。

@このハガキは新村文庫蔵・柳田国男一九四六『毎日の言葉』創元社に貼込。

41. 昭和二年四月六日(柳田自製絵ハガキ「自邸の庭にて」消印：千歳三三四・

六 京都市上京区小山中溝町十九 新村出様 「新村筆」昭和二十二年四月八日到来

出

童心録⁽¹⁾即日拝読了 御心境をなつかしみ申候 御礼申上候 此園大に荒れ竹垣ことくく朽ち去り野犬の足あと徑をなし候も 花ハこの春も盛にてしかも風無く 木蓮コブシボケミツキなど時を得かほに 樹蔭にはカタカコの花も七八分咲出申候 山河隔絶愁懐無限候
四月六日

(1) 新村出一九四六『童心録』靖文社 柳田文庫には所蔵なし。

42. 昭和二十六年四月二〇日(絵八ガキ「ねまり地蔵尊」消印：千歳)以下判読困難
宛先：京都市上京区小山中溝町十九 新村出大人 御左右 差出：東京世田谷区成
城町 柳田国男「新村筆」昭和二十六年四月二十三日つく

岡書院より語源考一拝受 早速精読了欽慕の情を乗し申候 羽田さん⁽²⁾の
話では五月八御上京可能のよし 半日とここに御緩話の期を得度候 其
折に話題に右御著に付する所感などわざと貯へもちをり候 御内君はし
め御一同様にくれ／＼よろしく御伝へ被下度候 四月二十日
五月一日ハ国学院大学にて米の話⁽³⁾をしようかと存し居候

(1) 新村出一九五二『語源をさぐる』岡書院。柳田文庫に所蔵あり。

(2) 羽田亨：15の(5) 参照

(3) 昭和二十六年五月一日、國學院大學大学院開講式に出席、「瑞穂の国」を
講演。

43. 昭和二十六年二月四日(絵八ガキ「十和田国立公園 絶景「定雲崎」の播雲」
消印：千歳二六・一一・四 宛先：京都市上京小山中溝町十九 新村出様 差出：

東京世田谷区成城三七七 柳田国男「新村筆」昭和二十六年十一月五日接手)

御葉書も雀の俳本も拝受御礼申上候 其後おからだにハ何の御障りもな
く候哉 小生十月三十一日夕やや疲れ帰宅仕候 木曾の山ハ柿の葉も実
も山桜も紅葉しをり候 尤うつくしく 翌日ハ又塩尻峠を越え湖水に富
士の景を賞くわんいたし候 両月ハ早速家■に示し 同人も感佩いたし
をり候 御内方へよろしくお伝へ被下度候

(1) 俳人・木村緑平(二八八八—一九六八)の句集(未詳)を指すか? 新
村出一九五二「瘦柿舎だより」(新全一三・五六三)に「緑平の雀の句集は、
前後二冊購入して、一は鳥類博士の川村多実二翁にあげ、他は先途来訪の、
柳田国男翁に献じました」とある。

@昭和二十六年一〇月一八日から三一日にかけ、柳田は関西各地および長野県
を旅行(柳伝年譜)。二五日に新村邸を訪問(新村文庫蔵「後狩詞記」書込)。

44. 昭和二十七年一月七日(絵八ガキ「官幣大社 鹿児島神宮 本殿拜殿」消印：
千歳二七・一・八 京都市上京区小山中溝町十九 新村出様 差出：東京世田谷区
成城町 柳田国男)

よい正月でございました 御二人様風も御引なされませんか 私ハ十月
からの咳をもちこし引こんでをります 時に私の俳諧評釈ハ先年ご覧下
されましたか もしまだならば今度再版しました故さし上げ度存します
一月七日夕

(1) 柳田国男一九四七『俳諧講釈』民友社。一九五一創元社より再刊。新村
文庫には民友社版所蔵。

45. 昭和二十七年七月六日(柳田自製絵八ガキ「自邸庭木を見る」消印：千歳二七・
七・七 宛先：京都市上京区小山中溝町十九 新村出様)

御歌集牡丹の園有がたく存候 一昨日ハこの二階の小室にて一日静かに
拝誦仕候 一生斯うして歌を作りなされた上ハ歌人として後世にも御伝
はりなさるべく しかも御門派の無いことが全く御作をす／＼しくし
て居るやうに存候 奥様にも此よるこび御伝へ被下度候 柳田国男
又こんな葉書をこしらへ候 二月も前の庭の山吹、左の木ハ枇杷に候

七月六日

(1) 新村出一九五二・〇六『牡丹の園』白楊社、柳田文庫は未所蔵

(1) 柳田国男一九五三『稲の産屋』にひなめ研究会『新嘗の研究』第一輯、創元社

(2) 佐藤氏：未詳

46. 昭和二十七年一〇月一六日(柳田自製絵八ガキ「ヒバリ」) 消印：千歳二七・一〇・一六 宛先：京都市上京区小山中溝町十九 新村出様

先日は久々にて拝顔を得欣喜之至りに候御歓待奉深謝候 令内にもよろしく御礼御伝へ被下度候 小生等あの翌早朝故郷播州田原に帰り一泊それより山陰北陸飛驒木曾を返し一昨夕へとくに疲れ帰庵仕候 御芳信出發後二相成遅く拝見 折角の御厚意を利用し得ず 松かさはあるから始終念頭を去らず小庭の琉球松のも市河家の親木のと共に必ず御送可申上候 放送ハ御聴被成候や如何 十月十五日ノ夕 柳田国男拜
これハ此五月の写真、題は「ヒバリ」

(1) 市川三喜(一八八六—一九七〇) 英語学者

@昭和二十七年一〇月四日に大阪朝日新聞社講堂で開催された日本民俗学会第四回年会のため関西に訪れた柳田は、六日、京都市民会館で「近畿と民俗学」を講演した後、故郷福崎に立ち寄り、城崎、天橋立、金沢、高山、下諏訪を経て帰宅する(柳伝年譜)。

47. 昭和二十八年八月一五日(絵八ガキ「牧場風景」) 消印：千歳二八・八・一七

宛先：京都市上京区小山中溝町十九 新村大人御次 差出：東京成城 柳田国男
夏中御元氣 何よりと存じ上候 小生ハ此夏例の新嘗考の一部を草了し度 淋漓たる汗とた、かひ且つ疲弊困敗しおり候 佐藤氏⁽²⁾よりも直にも手紙を承ハリたし声援をいたし候も書く方ハ多分間に会うまじく候御答

へ申置候 八月十五日

48. 昭和二十九年五月八日(柳田自製絵八ガキ「座敷にて」) 消印：千歳二九・五・八 宛先：京都市上京区小山中溝町十九 新村出様 「新村筆」昭和二十九年五月十日つく

御ねんごろな御手紙拝見 成るほどやはり御用心の方がよいと存じます もう一度あなたの為に尤も御都合のよい機会を作りたいと先方でも言つて居ります 十分御養生を念じ上ます 今度は口切りは私が代理いたします なほ追て事情を申上ます 奥様も御大切になされませ 五月八日 柳田国男
何か申継ぐべきことがありましたら随時御令聞下さい

@昭和二十九年五月一七日の国立国語研究所評議会、もしくは、五月一八日から二五日にかけて皇居で開かれた言語学研究会に関するものか(柳伝年譜)。

49. 昭和三〇年二月二四日(柳田自製絵八ガキ「喫煙中」) 消印：千歳三〇・二・二四 宛先：京都市上京区小山中溝町十九 新村出様

近頃御無音に過ぎ候 御近状如何 殊に令室の御様子ハ如何と存居候 主翁の方ハ最近数次の風説によれハ可なり御元氣のよしはハ何よりの好声音に候 小生の如きハ増々困敗且つ役廻人に小言をいふ為に活きて居申候か如き感有之我ながらうとましき限りに候 松岡一族中八十に達せし

もの古来■のやうに被存た、そのみを以て周辺の者をよるこばせをり候。テープの周波数のちがひわびしく何とかして今度テープにて御話したく存候

50. 昭和三十一年三月二日(柳田自製絵八ガキ「上半身象」消印:千歳以下判読困難) 宛先:京都市北区小山中溝町十九 新村出大人 御答「新村筆」昭和三十一年1956三月十二日午後(く)

久々に御手札を承ハリなつかしく拝見仕候。あの二つの問題ハ近頃あまり熱心な人なく、やはり郷土研究時代のものを援抄する外なきかと存候。スワンメエデンの類型ハ南の島ニいくら濃かに書てあり候ことまでハ申上得られ候。奄美諸島などの昔話集ニ或ハ御参考になるもの一、二冊ハあるかと存じ候。専門家の女性もあり御紹介可申上候、この五月ハ今から八つ目うなぎでも御服用御断行尤も御願はしく候。御奥方御様子如何。よろしく御伝へ被下べし。二月十日

地続きに小屋の隠居を構へ、文庫と別れていろく不自由に候

51. 昭和三十一年三月二日(絵八ガキ「平家物語」 応永写本」消印:千歳三三三)

三二 宛先:京都市北区小山中溝町十九 新村出様 差出:東京成城町 柳田国男) 次々の御手札御書状恐入候。それよりも大に元氣を出したまふことを念願してヤツメウナギの油(カプセル入)少々御送り申候。小生等二人ハもう半年近くも用ゐをり腸の力が強くなるやうに存候。小生ハ煙草禍故朝夕三粒づ、食後に服用候も貴台は其禍なき故二粒づ、にても十分かと存候。令室にも御す、め被下度。いかほとも追つてさし上度候。謹言

@新村の礼状あり。新村出一九五六・〇三・二九「広辞苑」その後「産業

経済新聞「新全九:二〇七」に言及あり。

52. 昭和三十一年八月五日(柳田自製絵八ガキ「自邸の庭にて(晩年)」消印:千歳三一・八・五 宛先:京都市北区小山中溝町 新村出大人 御次「新村筆」昭和三十一年八月六日受信)

八月四日朝「二〇〇三字欠」此暑さいか、
「二〇〇三字欠」き申上候折柄「二〇〇三字欠」の養生生活又候のも感興羨ましき迄の悠々たる御「一字欠」夕あ「一字欠」の胸を撫で申候「二〇〇三字欠」べると小生は可なりあく「五〇〇六字欠」どもそちらより喰らう「二〇〇三字欠」申候。先日の一「四〇〇五字欠」も「一字欠」しく存じ候ハ、と「七〇〇八字欠」被下度候。柳田国男

追白 六十年前と申すとそれだけがもう話題になるやうに候。鳥崎藤村の椰子の歌についての逸話。ラジオ東京に頼まれ吹込申置候。此月二十一日頃の早天に出るもの。或ハ都の空までハ届き申まじく。その場合ハ文にして御目にかけて度存居候。柳叟

(1) 昭和三十一年八月二〇日、ラジオ東京「朝の談話室」の時間に「椰子その他の寄物の話」を放送(柳伝年譜)

53. 昭和三十五年二月一〇日(柳田自製絵八ガキ「自邸の庭にて孫たち」消印:千歳三五・二・九 宛先:京都市上京小山中溝町十九 新村出大人 御次「新村筆」35—2—10 p.m)

御書齋御無事に候哉如何。此寒さの此さはりもおはしまさず候や。小生の正月は風にて外にも出ず候。関口君の此文集を今度も拝見四十年前の想ひ出をつゞけて居ります。一ぺん夫人の御ところ音信申上度御住居

は今も鎌倉の浄智寺内なりや御教へ承はり度この成城にも妹君住み給へりとき、候が今にも候や如何 柳田国男
久しく御訪問を怠りをり候

(1) 関口泰著、関口隆克編一九六〇『空のなごり 黙山関口泰遺歌文集』刀江書院。著者・関口泰(二八八九―一九五六、ジャーナリスト)は新村の生家父方の親戚にあたり、新村が題言を寄せる。柳田にとっては朝日新聞論説委員時代の同僚。

54. 昭和三十六年五月四日(柳田自製絵ハガキ「自邸庭木を見る」 消印:千歳三六・五・六 宛先:京都市北区小山中溝町十九 新村出様 御左右 「新村筆」 昭和36(1961)―5―8受)

久しく御尋ねも怠つて居りますが御きげん奈何におはし候や あなたはもう此の五月の会も御上京(1)なされませぬか 私も大分弱くなりましたがもし幸ひあなたより御出でになるやうなら勉強して御出逢?ひ二出たく存じて居ります 旧い人たちが段々へりますので一人で行つてハ物を言ふ元氣が出ません

五月四日 柳田国男 「新村筆・昭二十六年」

上洛中止の内規も折々ハ後悔するほど御面会の折を待ちこかれて居ります

(1) 学士院例会

〔参考〕新村出の柳田国男宛書簡

昭和三十二年三月二日(ハガキ 消印:京都三一・三・三二 宛先:東京都世田

谷区成城町三七七 柳田国男様 差出:京都市北区小山中溝町十九 新村出)

昨日ハやつめうなぎの油のおくすり一トカン頂戴いたしありがたう存候
朝昼晩二三粒づ、三回とあれども朝晩ほか食用せず(毎朝十時半起床、十一時朝食)従て二回にとゞめおく分よろしきとて存候 御懇切多謝深謝 昭和三十一年三月春分後一日

- 夏痩せにきくとふくすり春にもと国男のをちがむなぎたばせる
- ものゝのふの八十ちおきなを励ますと八つ目のうなぎたまひけるかも
- ヴィタミンゆたかなりとふいざのまむやつめうなぎの肝のくすりを
- 上野山花橘のかをるころさつきなばのしるし待たなむ
- あづさ弓春のこゝちのみなぎらばHeroをこひてたらひ舟こがむ

@柳田よりヤツメウナギ油の錠剤を贈られたことに対する礼状(昭和三十二年三月二日消印の柳田ハガキ参照)。新村出記念財団にコピーを所蔵。なお、同ハガキはつい最近、成城大学民俗学研究所で現物が発見され、成城大学民俗学研究所編・発行『特別展 柳田国男 五感とことばの世界―「日本民俗学」百年前の産声― 解説・目録』(二〇一〇)に紹介されている。

(京都大学人文科学研究所、国立歴史民俗博物館共同研究員)
(二〇一〇年七月二六日受付、二〇一〇年一月三〇日審査終了)

Dear Izuru Shinmura : Fragment of History of Folklore Studies Seen in Letter of Kunio Yanagita

KIKUCHI Akira

This article proposes “Kyoto as a method” in order to challenge a series of biased views such as “Yanagita-centric historical view,” “Tokyo-centric historical view,” and “pure folklore-centric historical view” that exist in conventional “history of folklore studies.” This article examines Izuru Shinmura (1876 - 1967), who was an editor of the national dictionary “Koujien.” Shinmura continued to be a friend of Kunio Yanagita for life, but the meaning of this friendship in the history of studies has not been fully discussed. One of the reasons for this is that no materials that evidence the exchanges between them had been found. However, the author of this article found more than fifty letters from Yanagita to Shinmura during research on materials in Chozan-bunko Collection of Shinmura Izuru Foundation and Shinmura-bunko Collection of Osaka City University. For convenience, the letters may be classified into a) responses for research, b) favors for materials, c) folklore studies as a movement, d) dialectology as a movement, and e) records of friendship. From these letters, the following facts have been confirmed: they exchanged opinions mainly on vocabulary studies from the late Meiji period to their last years; Shinmura obtained permission of reading materials by favor when Yanagita was the chief of the record section of the Secretary to the Cabinet; Yanagita consulted Shinmura who was the director of Kyoto University Library about the purchase of materials; Yanagita asked Shinmura to introduce him to persons concerned of Kyoto University for the grant for “Survey on Mountain Village” (1934 - 1936); for the management of the Society of Japanese Dialects founded in 1940, Yanagita consulted about various things such as study meetings, publication of the journal of the Society, selection of chairman, financing, etc. Such relationship between Yanagita and Shinmura may be considered an “inescapable relationship” since the time at Daiichi High School. However, we should remember that their relationship was based on their basic agreement on language recognition such as strong will toward “living language,” insatiable collecting of materials, and optimism for progress of language. Furthermore, it is noteworthy that their relationship promoted exchange between researchers around Kyoto University and the folklore studies of Yanagita.

Key words: Kunio Yanagita, Izuru Shinmura, Kyoto, language, letter
